



(左上)中日新聞(夕刊)2004.10.27.(左下)「阪神・淡路大震災10年全記録」
(中)「報道写真&記録DVD1 10.23新潟中越地震 1年の記録」
(右)「特別報道写真集 新潟県中越地震」

13:30~13:45 開会に際して 外国人を災害弱者としないためには

岡本耕平(名古屋大学大学院環境学研究所)

13:45~14:30 阪神・淡路大震災で私たちがやってきたこと
~日本における多文化社会の実現は可能か?

田村太郎(NPO法人多文化共生センター)

14:30~15:15 新潟県中越地震で私たちがやってきたこと
~日本の常識は世界の非常識?

羽賀友信(長岡市国際交流センター)

15:15~15:30 休憩

15:30~17:00 パネルディスカッション

「地震を迎え撃つ東海地域で、私たちが今すべきこと」

司会:佐藤久美(英文情報誌「アベニューズ」編集長)

出席者(50音順)(予定):

木村玲欧(名古屋大学災害対策室)

田中京子(名古屋大学留学生センター)

田村太郎(NPO法人多文化共生センター)

羽賀友信(長岡市国際交流センター)

三池・アリセ・ミホ(財団法人浜松国際交流協会)

阪神・淡路大震災と
新潟県中越地震の教訓から



シンポジウム

災害弱者をどう救うか

~外国人への情報提供を考える~

平成18年3月18日(土) 13:30~17:00

名古屋大学環境総合館・1階レクチャーホール

主催:名古屋大学大学院環境学研究所・多言語防災情報研究開発コンソーシアム・名古屋大学災害対策室

問合せ:災害対策室 TEL052-788-6038 <http://www.seis.nagoya-u.ac.jp/~taisaku/>

多言語防災情報翻訳システム

다언어 방재정보 번역 시스템

多语言防灾情报翻译系统

Template System for Translating Disaster Information into Multiple Languages

Sistema de tradução multi-lingual para informativos sobre desastres

Updated date 2005.3.14



災害弱者をどう救うか外国人への情報提供を考える

2006年6月 名古屋大学



災害

情報

阪神・淡路大震災と
新潟県中越地震の教訓から

名古屋大学

シンポジウム

災害弱者をどう救うか

外国人への情報提供を考える

シンポジウム

災害弱者をどう救うか

～外国人への情報提供を考える～

阪神・淡路大震災と
新潟県中越地震の教訓から

名古屋大学

はじめに

本書は、2006年3月18日に名古屋大学環境総合館レクチャーホールで開催されたシンポジウム「災害弱者をどう救うか～外国人への情報提供を考える～」の報告書です。このシンポジウムは名古屋大学大学院環境学研究科・多言語防災情報研究開発コンソーシアム・名古屋大学災害対策室の共催により地域貢献事業の一環として企画されました。

近年、日本に観光やビジネスで短期的に訪れる外国人も、就業・就学のため長期間滞在する外国人も、ともに急速に増加しています。法務省の統計によれば、昨年1年間に日本に入国した外国人は745万人であり、前年に比べ61万人増加しました。また、日本に90日を越えて滞在中の場合に義務づけられている外国人登録を行った人数も昨年末に初めて200万人を突破しました。今後もこれらの数字は増加し続けると予測されます。

こうした来日・在住外国人の増加に伴い、国際交流や共生社会をめぐる様々な議論がなされていますが、本シンポジウムでは災害・防災の観点から議論を行いました。災害時に、外国人はいわゆる「情報弱者」になりやすい。これは日本語が不自由であるといった言葉の問題からだけでなく、災害そのものへの情報不足・知識不足からきます。例えば外国人の中には地震がほとんど起こらない国から来る人々もいて、日本に来てから生まれて初めての地震に遭遇して極度のパニックに陥る場合があります。さらに、発災後の避難所生活で、日本人には常識であるようなことが理解できなかつたり、日本人には必要のない在留資格の更新手続きなどの情報が必要になったりと、外国人は様々な面で、日本人とは異なる苦労や不安に見舞われる可能性があります。

災害弱者・情報弱者としての外国人の問題が最初にクローズアップされたのは、1995年の阪神・淡路大震災です。そして、2004年の新潟県中越地震では、阪神・淡路大震災の経験を生かし、また様々な独自の工夫により外国人に対する支援が行われました。本シンポジウムでは、これらの活動において中心的な役割を果たされた田村太郎さんと羽賀友信さんに講演していただきました。そして、地元東海地方で外国人の防災支援に関わってこられた方々を交えてパネルディスカッションを行いました。

東海地域は、せまりくる東海地震で大きな被害が危惧される地域であると同時に、外国人の増加率が日本の中で最も高い地域です。阪神・淡路大震災と新潟県中越地震の教訓を生かし、外国人を災害弱者としない道筋を見出すうえで、本シンポジウムが役立つことを願っております。

末筆となりましたが、シンポジウムの講演者・パネリストを快く引き受けていただきました皆様に厚く御礼申し上げます。また、シンポジウム当日に熱心に議論に加わっていただきました来場者の方々にも感謝いたします。

2006年6月
名古屋大学大学院環境学研究科教授
岡本 耕平

目 次

はじめに

シンポジウム「災害弱者をどう救うか～外国人への情報提供を考える～」

開会に際して

「外国人を災害弱者としないためには」(岡本耕平 名古屋大学大学院環境学研究科) 3

基調講演

「阪神・淡路大震災で私たちがやってきたこと～日本における多文化社会の実現は可能か？」

(田村太郎 NPO 法人多文化共生センター) 8

「新潟県中越地震で私たちがやってきたこと～日本の常識は世界の非常識？」

(羽賀友信 長岡市国際交流センター) 21

パネルディスカッション

「地震を迎え撃つ東海地域で、私たちが今すべきこと」 36

司 会 佐藤久美 (英文情報誌「アベニューズ」編集長)

出席者 木村玲欧 (名古屋大学災害対策室)

田中京子 (名古屋大学留学生センター)

田村太郎 (NPO 法人多文化共生センター)

羽賀友信 (長岡市国際交流センター)

三池・アリセ・ミホ (財団法人浜松国際交流協会)

資 料

(財)横浜市国際交流協会による「災害時に役立つ外国語の表示シート集」について 63

シンポジウム

「災害弱者をどう救うか～外国人への情報提供を考える～」

日時 平成 18 年 3 月 18 日 (土) 13:30 ~ 17:00

場所 名古屋大学環境総合館 1 階 レクチャーホール

開会に際して

「外国人を災害弱者としないためには」

岡本 耕平 (名古屋大学大学院環境学研究所)



震災では外国人の死亡者が多い

名古屋大学の環境学研究所の岡本と申します。このシンポジウムの企画者を代表して、シンポジウムの趣旨について簡単に述べさせていただきます。

今日は二人のこの分野では非常に著名なかたに来ていただき、パネリストも含めてこれだけの人がそろうということはなかなかないと思います。すごい企画になったことを、講演者、パネリストの人たちに御礼を申し上げたいと思

ます。

最初に講演者のかたがたには、阪神・淡路大

阪神淡路大震災における兵庫県内の国籍別死亡者 (単位:人)

被災地	全体	日本	韓国朝鮮	中国	アメリカ
住居者	3,589,126	3,513,038	55,648	12,472	1,951
死亡者	5,476	5,293	121	44	8
死亡率	0.15	0.15	0.22	0.35	0.10
被災地	ブラジル	インド	ベトナム	フィリピン	その他
住居者	1,806	1,025	955	874	—
死亡者	8	0	0	2	6
死亡率	0.44	0	0	0.23	—

出所：酒井道雄著、『神戸発阪神大震災』、岩波新書、1995年、88～89頁
<http://nippon.zaidan.info/seikabutsu/1999/00786/contents/100.htm>

図表 1

年齢別外国人死者数と外国人が占める割合

年代	合計	外国人死者数	外国人が占める割合
0～10	249人	10人	4.0
10代	310	4	1.3
20代	470	28	6.0
30代	261	20	7.7
40代	468	20	4.3
50代	814	24	3.0
60代	1,061	32	3.0
70代	1,029	29	2.8
80代	736	7	1.0
90代	95	—	—

出典：外国人地震情報センター編、「阪神大震災と外国人」、76頁
<http://nippon.zaidan.info/seikabutsu/1999/00786/contents/100.htm>

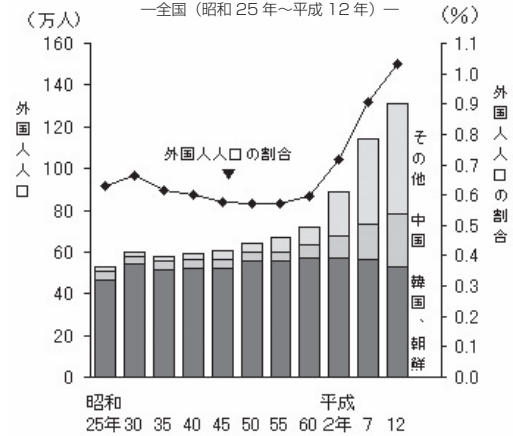
図表2

震災と中越地震について話していただくわけですが、図表1は阪神・淡路大震災のときの国籍別の死亡者数を表した表です。死亡率を見ていただきますとわかりますように、日本人より外国人の死亡率のほうが高くなっています。特に中国、ブラジルの人です。韓国・朝鮮系の人たちも多いのですが、もっと多いのがブラジルです。これは多分言葉の問題もありますし、いわゆるオールドカマーとって、日本に長く滞在していろいろな経験を経ている韓国系の人たちに対して、比較的新しく来た人たちに被災者が多かったのです。それから、こういう人たちが住んでいるところが、比較的地震に弱いところだったなど、いろいろなことが関係していると思います。

図表2は年齢別の外国の人の死亡率を示しています。比較的若い人の死亡率が高いわけです。外国からやってきて大学で勉強している留学生たちはアルバイトをしながら苦勞して生活しています。そういう人たちの多くが、安い木造住宅に下宿しています。被害の多かった長田区などの工場で働いている外国人労働者の人たちは比較的年齢が低く、そういう人たちが多く被害に遭ったということです。いずれにせよ、日本人に比べて外国の人たちの被害率が高かったということが分かりました。

図表3は国勢調査のデータです。近年、急激

外国人人口及び外国人人口の割合の推移



国勢調査データ <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2000/gaikoku/00/01.htm>

図表3

に日本に居住する外国人の割合が増えています。国勢調査はいわゆる定住人口という、3か月以上住んでいる人のみを把握しているわけですが、それでも急激に増えています。それ以外に、短期の人、国勢調査に書かなかった人、あるいは観光客も含めると、非常にたくさんの外国から来た人が日本で生活するようになっています。特に、従来から多かった韓国・朝鮮籍、中国籍以外の人たちが急激に増えています。

例えば、図表4は愛知県です。入管法が改正されて、ブラジル人が増えています。二世、三世といった、いわゆる日系といわれている人たちが単純労働でも入国できるようになった入管法の改正以後、特に今まであまり日本に住んでいなかったような人たちが非常に増えているのです。

特に愛知県は外国人の割合がすでに人口の2.5%になっています。これは登録している人だけです。愛知県は自動車関連の工場が多いということもあって、外国人の中でも特に工場で働くようなブラジルやペルーの日系の人たちが非常に増えています。

今日はその辺の話を、日本の中で最もブラジル人が多く居住している浜松から三池さんに来ていただきましたので、詳しいこととお話し

愛知県の外国人登録者数の推移

	1988年(63) 入管法改正前	1991年(44) 改正入管法施行翌年	1985年(H7)	2003年 (H15)	2004年 (H16)	
外国人登録者数	62,967	98,363	107,931	167,270	179,742	
総人口に占める割合	1.0%	1.5%	1.6%	2.3%	2.5%	
主な国籍	ブラジル	248	24,296	29,787	57,336	63,335
	韓国・朝鮮	55,396	55,207	52,407	45,006	44,135
	中国	3,219	6,711	10,389	23,143	25,567
	フィリピン	1,208	3,273	4,650	17,197	19,863
	ペルー	15	3,262	3,366	6,384	6,987
その他	2,881	5,614	7,332	18,204	19,855	

<http://www.pref.aichi.jp/kokusai/tourokusyasuu/16touroku.html>

図表4

ただけだと思います。

なぜ外国のかたがたが特に震災時に弱者となったかですが、新しく日本に来た人たちの多くが日本語ができないことが原因の一つとしてあげられます。震災時に、何が起こったかわからない、情報遮断の状態に置かれてしまったということです。それから、母国では地震というものに遭遇したことがなかったことが被害を大きくしたとも考えられます。

名古屋大学でもたくさんの留学生が勉強しています。留学生は日本語が上手な人もいます。しかし、災害時のようなパニックのときに、一体どこまで日本語が分かるかという問題があると思います。

もう一つは、日本は厳しい入管法で単純労働の労働者の入国を禁止しています。しかし、実態は多くのいわゆる不法入国者といわれている人たちがいます。そういう人たちは災害時も公の支援に頼ることをためらったり、実際に支援されないことがありました。それから、外国人の健康保険の問題など、いろいろなことが重なって被害が大きくなったということです。

震災時の外国人への情報提供の試み

しかし、今後も日本は外国の人たちが増えていく現状にあり、そういうことを見過ごしておくわけにはいきません。いろいろな問題があるわけですが、言葉の問題に限った場合、いかに発災前あるいは災害が発生してから言葉の壁を越えて情報を提供できるかということが課題に

7月10日、午前9時45分頃、東海地方を中心に震度6弱の地震がありました。

英語に翻訳

On July 10 at around 9:45 a.m., there was an earthquake centered in the Tokai Area that registered a little less than 6 on the Japanese seismic scale.

ポルトガル語に翻訳

Dia 10 Julho as 09:45hs da manha houve terremoto na Area de Tokai aproximando a 6 graus de tremor.

図表5

なるわけです。

今から5年ほど前になりますが、今日、パネルの司会をしていただく佐藤久美さんと名古屋大学の情報連携基盤センターの宮尾克さんと私と3人で何か研究をしようということになりました。当時、愛知県は、万博の開催を控えていましたし、中部空港が開港されると外国人が増えることが予想されました。さらに、東海地震の対策の強化地域に指定されたこともあって、外国から来る人のために、地震に対応したものができないかということで始めたのが、今日、主催者の一つになっている多言語防災情報提供システムのコンソーシアムです。

それを簡単に紹介します。災害時の情報というのはかなり定型的です。実際に人をつけて翻訳するのは非常にコストもかかるので、この定型的ということを生かせないかということです。「7月9日、午前9時45分ころ、東海地方を中心に震度6弱の地震がありました」「〇〇市△△地区の住民に避難勧告が出されました」といった定型文をあらかじめ翻訳しておいて、「〇〇」や「△△」の、場所や時間や震度のところだけ発災時に入れるようにします(図表5)。そうすれば、瞬時に、しかも安く、正確に災害情報を提供するシステムになります。

しかし、外国の人は、例えば「震度6弱」、「東海地方」の意味が分かりません。それで、東海



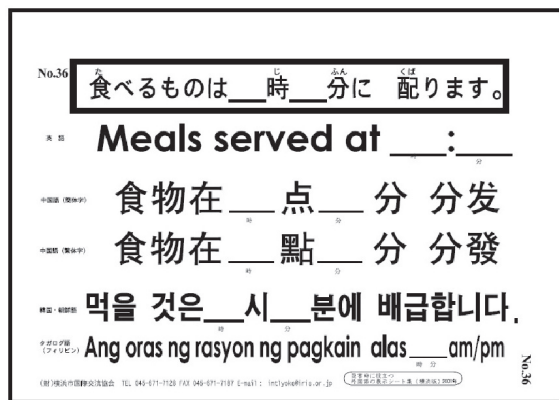
図表6

地方とは愛知県、岐阜県、三重県だということや、震度6弱とは立っていることが困難ほどの揺れだといった情報もつけます。これで複数の助成機関からお金をもらってシステムを開発しました。災害対策室のホームページに「多言語防災情報翻訳システム」というのがあります。ぜひ一度ここを訪れてください。

こういう試みは我々以外にもいろいろなところで実際に行われています。例えば横浜市国際交流協会のホームページでは、「災害時に役立つ外国語の表示シート」をダウンロードできます(図表6)。我々と同じように、定型文の中で抜けているところだけに数字を記入するという形式です(図表7)。我々のものはパソコン



会場風景



図表7

上でやるのですが、これは印刷して実際に現地で張って使うものです。ベトナム語やタイ語なども含め多くの言語をカバーしています。これは実際に中越地震のときに使われました。

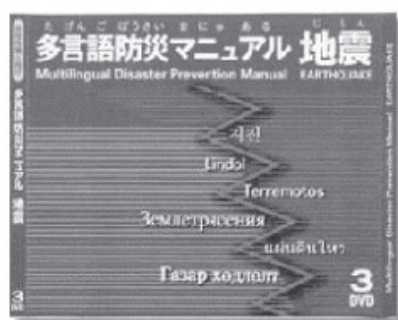
私が見た中でも一生懸命やっているところは宮城県や仙台市です。仙台の国際交流協会ではこういうビデオ（DVD）を作っています（図表8）。これはたくさんの言葉に対応していますし、非常によいビデオです。こういう試みが

各所でなされています。

国でも消防庁の外郭団体で「地震に自信を」というパンフレットを作っています。仙台や横浜のような大きな自治体でなく、予算の少ないところもこういうものを使って外国人への配慮をするという試みはなされています。

私もこういうことを勉強させていただきましたが、今日お話しいただく田村さんから、せっかくいいシステムを作っても、実際に現場でどういうことが行われているか、みんながどういうふうを考えているかを知らずしては、結局生きないと言われました。学者の世界は往々にして作って喜んで終わりということがあるわけですが、そういうこともあって、私としてはいろいろ現場の声を聞きたいと思っています。今日はベストの講演者、パネリストのかたがたに集まっただいて、生きた話が伺えるのではないかと期待しております。

仙台国際交流協会



〔DVDジャケット表面〕

- 日本語
- やさしい日本語
- 英語
- 中国語
- 韓国・朝鮮語
- タガログ語



〔DVDジャケット裏面〕

- スペイン語
- ポルトガル語
- ロシア語
- バングラ語
- タイ語
- モンゴル語

図表8

「阪神・淡路大震災で私たちがやってきたこと ～日本における多文化社会の実現は可能か？」

田村 太郎 (NPO法人多文化共生センター)



阪神・淡路大震災で外国人の被害が多かったのはなぜか

もう11年になりますが、阪神・淡路大震災とそのあとにどんなことをしてきたのかということ、今日はお話しにまいりました。11年前といたしますと、日本の総理大臣は村山さんでしたから、随分前だなという感じがします。あのころはまだインターネットもほとんど普及していませんでしたし、私が携帯電話を持ったのは震災直後でした。モトローラという会社から寄付をいただきまして、6台の携帯電話を持って、私たちは被災地で活動しました。あのころの携帯電話は10分ほどしゃべっていると熱くて持てなくなりました。そういう時代でした。もう今の状況とは違う部分があるかもしれませんが、阪神・淡路大震災は、日本で多

言語の情報提供の必要性やボランティアの有効性を示したきっかけだと思いますので、もう一度皆さんと一緒に振り返ってみたいと思います。

阪神・淡路大震災は、かなり広い範囲で揺れました。災害救助法が適用された兵庫県内の10市10町（神戸市、尼崎市、西宮市、芦屋市、伊丹市、宝塚市、川西市、明石市、三木市、洲本市、津名町、淡路町、北淡町、一宮町、東浦町、五色町、西淡町、三原町、緑町、南淡町）に限っても外国人登録者数が約8万人です。関西では在日の韓国・朝鮮の方がたくさんお住まいですし、神戸には中華街等もあります。それゆえ外国籍だけでもふだんから日本語を話している方もたくさんおいでです。しかし、それを差し引いても、約2万人の人が普段は日本語を使

阪神大震災と外国人

約8万人の外国人が居住
(兵庫県内 10市10町)

うち、約2万人が
「非日本語話者」



図表 1

わずに生活していたことになります。

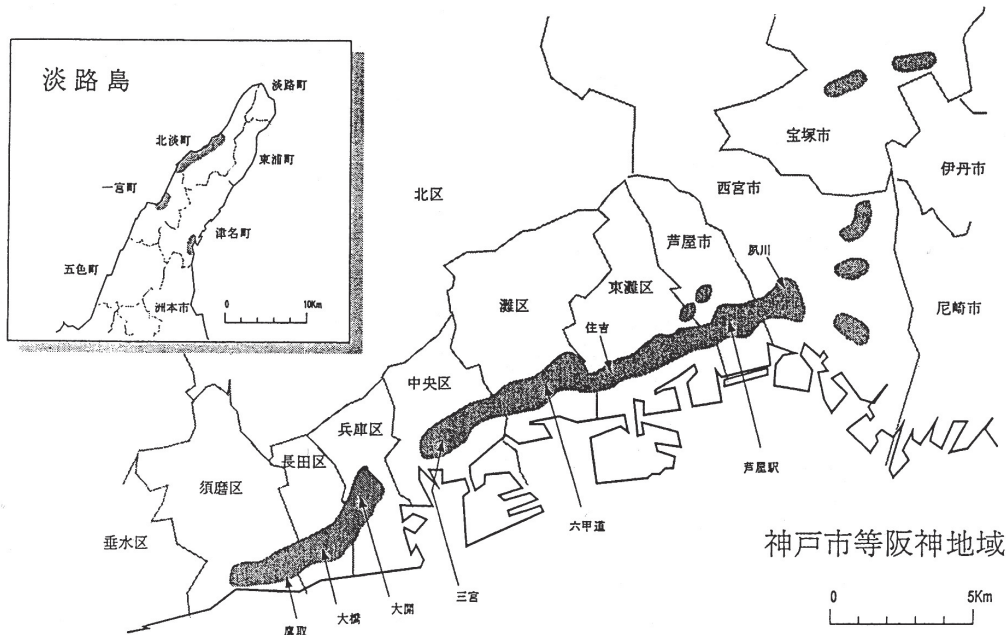
写真は阪神・淡路大震災の被災地です（図表1）。外国人のことに限らず、用意していたものが役に立たなくなるのが災害時です。右下の建物は神戸市役所です。市役所もつぶれました。中には国際交流協会が当時もありましたし、ボランティア登録者もあったのですが、国際交流協会が入っていた建物に入れなくなりました。当然、ボランティアへの連絡がとれないわけです。事前に用意していたものが機能しなくなるというのが災害時です。

右の上は阪神高速道路が倒れているところです。ちょうどこの地域がブラジル人の多い地域、神戸市の東灘区という地域でした。真ん中は長田区だったと思いますが、下のほうだけ見ていると、世間話をしている感じですが、上を見ると煙がもうもうと出ています。よくこんなところで世間話をしているなという感じですが、現場にいますとそんなに違和感はありません。迫っているが、とりあえずここは安心という感じです。左は仮設住宅です。

図表2は被災地の地図です。黒く塗ってある

ところが震度7の地域です。大阪・神戸間は鉄道が3本走っております。いちばん海側が阪神電車です。真ん中をJRが走っていきまして、いちばん山側を阪急電車が走っています。この、阪神電車と阪急電車の間がだいたい震度7の地帯です。非常に揺れが激しくて、住宅の倒壊が激しかった地域です。家がつぶれたところを震度7と言っているのではないかなと思うくらいです。この地域は古い住宅が集積している地域でもあります。

この北側に六甲山という山があります。六甲山は地盤が硬いので六甲山より向こうに揺れがいかなかったと我々は聞かされています。そこで揺れが戻ってきて、平野部分を何度も揺すって家がつぶれたといわれています。この地域はつまりインナーシティー、旧市街地ということになります。古い住宅がたくさん密集しています。古い住宅は家賃が安いです。それから、先ほど鉄道の話をしました。駅から近いので交通費が安くて済みます。山の上のほうですとバス代がかかりますので、駅の近くは安上がりです。



図表2

そういう家賃が安い、交通の便がよいところにだれが住むのかといいますと、いちばん多いのは高齢者の独り暮らしです。男性は残念ながら早く死にますので、女性の高齢者の独り暮らしが多いのです。私の父の母親も震災のとき、ちょうど西宮の真ん中あたりに住んでおりました。地震で家がつぶれて4時間生き埋めになりました。私の祖母に代表されるように、独り暮らしの女性の高齢者が駅前の木造の賃貸住宅に住んでいるわけです。

そのほかに障害者も木造の家賃の安い住宅に住んでいます。例えばおしゃれなデザイナーズマンションはバリアだらけですので、車いすでは生活できません。賃貸住宅を借りるのも苦労される方々です。そして、外国人ということになります。留学生もアパートを借りる際に家賃の安い木造住宅、駅から近いところを選びます。駅前の居酒屋さんでアルバイトをしながら、木造の賃貸住宅で生活しています。

図表3は亡くなった外国の方の統計です。二重国籍のかたはどうカウントするのかとかいろいろありますが、兵庫県警の発表で174人の外

国人が亡くなっています。174人というのは多いですね。阪神・淡路大震災では震災関連死を含めて全体で約6500人が亡くなっていますが、今日の講演では1995年2月時点の5493人が死者ということでお話しをします。外国人はこのうちの174人ということになるわけで、亡くなったかた全体に占める割合が3.17%です。地域別でも出してみたのですが、人口に占める外国人の割合よりも死者に占める外国人の割合のほうが1ポイントほど高いと言えます(図表4)。

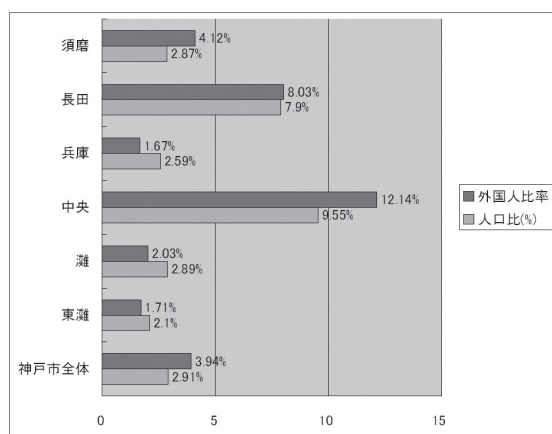
どうして外国人の被害が大きかったのかということとは先ほど申し上げたようなことです。震度7の地帯にたくさん住んでいたということと、住んでいたのが木造で築年数が古い住宅

亡くなった外国人の統計

国籍	人数	合計(人)	外国人死者数(人)	外国人が占める割合(%)	
韓国・朝鮮	112				
中国	44				
ブラジル	8				
ミャンマー	3				
アメリカ	2				
フィリピン	2				
アルジェリア	1				
オーストラリア	1				
ペルー	1				
	174				
		0~10	249	10	4.02
		10代	310	4	1.29
		20代	470	28	5.96
		30代	261	20	7.66
		40代	468	20	4.27
		50代	814	24	2.95
		60代	1,061	32	3.02
		70代	1,029	29	2.82
		80代	736	7	0.95
		90代	95		0
		全体	5,493	174	3.17

図表3

人口と死者数に占める外国人の比率



図表4

だったことです。関西では「文化住宅」と言いますが、火事になると燃えやすい住宅がたくさんありました。ブラジル人が8名亡くなっていますが、同じ文化住宅の1階でなくなっています。木造の築年数の古い賃貸住宅です。同じ職場で働いていて、派遣会社が借り上げた賃貸住宅がつぶれたということです。他にも留学生のかたもたくさん亡くなっていますが、同じ理由です。アメリカ国籍のかたは、死亡者数が2名と少ないですね。アメリカ人は山の手の地盤がしっかりしたところにお住まいです。死亡率も国籍によって違ってくるといっていいのでしょうか。

阪神・淡路大震災で FEIC を始める

ここから私たちがやってきたことの話に入りたいと思います。震災のとき私は兵庫県伊丹市に住んでいました。先ほど言いましたように、私の父の母は4時間生き埋めになっていましたが、その他の親戚も西宮市と尼崎市にたくさん住んでおりました。親戚じゅうで震災当日に電気と水道がきたのが私の実家だけだったので、おにぎりを持って親戚じゅうを回りました。

当時、私は仕事で在日フィリピン人向けのレンタルビデオ屋をやっていました。この仕事を

大阪でやっておりまして、1月18日に職場に行きました。車で伊丹から大阪までは空いていると30分で着くのですが、その日は4時間かかりました。途中、新幹線のけたは落ちていますし、電線がグラグラしていますし、大変でしたが、とりあえず大阪に行きました。

こんな状況でも、ビデオ屋にはお客さんが来たり、電話をしてくるのです。怖いからビデオを見たいというのです。これを見て、同僚が「太郎ちゃん、これは何かしたほうがいいのではないの？」と言うのです。私は根が単純なものですから、そう言われますと、何かしたほうがいいかなと思ったわけです。

とりあえず何名か知り合いに声をかけまして、7言語で通訳が出る電話のサービスぐらいだったらできるかなという、安直な発想で地震翌日・1月18日のうちに準備をしました。準備をしておりますと、私よりも後先を考えずに行動する者が一人おりまして、「太郎ちゃん、明日の朝から大阪のFM放送で、7か国語のホットラインがあると流れるからね」と言うのです。もう流れるというので、退路を断たれて、1月19日の朝から7か国語のホットラインをスタートすることになりました。

19日の朝、電話番号が告知されているところに行きますと、電話がどんどん鳴っているのです。留守番電話のメッセージもたくさん入っていました。私が最初に出た電話で覚えているのは、自分が今どこにいるか分からないという電話でした。家族で車で避難を始めたが、走っているうちに自分たちが今どこにいるか分からなくなってしまったとのこと。あちこちでビルや家も倒れていて風景が違うために、どこにいるのかわからなくなってしまったようです。今考えれば、地震から3日目の朝に自分たちがどこにいるのかわからないという電話がかかってくるというのは尋常ではありません。当

時、大阪・梅田の百貨店ではバーゲンをやっています、こんなに近いところでバーゲンをしていていいのかと、私はまず大阪に出てびっくりしました。それを知っていたので、「山を左に見てまっすぐに進めば大阪に出るから、そこに行けば何とかなるよ」と話をして電話を置きました。

そのあと、あまりにたくさん電話がかかってくるものですから、7人でやっている場合ではないということで、事務所を確保するよう動き、ボランティア募集の記事も新聞に書いてもらいました。地震発生から1週間になる1月23日に外国人地震情報センターというのを正式に立ち上げることができました。活動という意味ではこの1月23日が最初ということになります。それまでは暫定的にやっていたということです。

外国人地震情報センターというのは、Foreigner's Earthquake Information Center、略して「FEIC」（フェイク）と言っていたのですが、フェイク（fake）というのは英語でまがいものとかうそとかいう意味ですが、やってい

ることはリアルだったのです。

募集しましたら、ボランティアが最初の1週間で200人やってきました。半分はネイティブ、すなわち日本語以外の言葉話す人が、自分たちが何かやりたいということでやってきました。この人たちの存在が大変大きかったです。災害時情報を考えるうえで大事なことはここだと思います。日本人の通訳や翻訳者が情報を翻訳してあげるのではなくて、外国人で日本語の分かる人が情報を持っていく、あるいは、自分たちに必要な情報はこれなのだということを、自分たちから編集していくというのでしょうか、それが大事なことです。初期の外国人地震情報センターの活動が非常にスムーズにいったのは、こうした外国語ネイティブのボランティアがたくさんいたことだと感じています。もちろん、日本人のボランティアも大活躍しました。遠くは東京から泊まり込みで来ていたチームがおられましたし、バイクに乗ってやってきて1ヶ月事務所に寝泊まりしていたイギリス人もいました。電話での相談のほかに、ニュースレターの発行や、外国人を支援する団体がたく



会場の様子

さんできましたのでそういう団体の事務局機能も果たしました。

外国人の医療費問題への対応も重要な対応となりました。例えば、健康保険に加入していなかった方が震災でけがをした例です。この治療費がかなり高額の自己負担になりました。医療費は月末締めですが、混乱していたので1月中は治療費全額無料だったのです。2月分からは健康保険法の特例措置ということで医療費が無料になり、健康保険に入っていない人がこぼれ落ちる事態となりました。2月になっても入院している方は重傷だった人なので、かなり高額の治療費が当然かかってくるわけです。

私たちが知っているケースでいちばん高額だったのは、親子で500万円というケースがありました。それはとても払えません。災害時の治療費はいろいろだと思いますが、特に高額の治療費がかかるのは、人工透析が必要になるようなケースです。これはクラッシュ症候群というそうですが、長時間圧迫されていると、圧迫されていた組織から毒素が出るそうです。それが肝臓で処理しきれないので、ほうっておくと死んでしまいます。すぐに透析をしないとイケません。これは災害時以外にはほとんど起きません。交通事故で年に何件か起きるだけだそうです。阪神・淡路大震災のときはたくさん発生して、兵庫県外の医療機関にもヘリコプター等を使って搬送されました。被災地では電気も水道も止まって、人工透析ができないからです。大阪や和歌山の病院に搬送されたケースで、そういう高額の治療費の請求がありました。

3月の初めになると、そういう相談がたくさんくるのです。まくら元に300万円の請求書があるけどどうしようかとかそういう感じです。本人がかけてくる分にはまだいいわけで、病院からかかってくるような場合も多数ありました。うちに入院していた患者が、朝、起きたら

居ない。治療費のことはいいが、あの人はまだ足が裂けたままなので、探してくださいという電話がかかってきたのを覚えています。

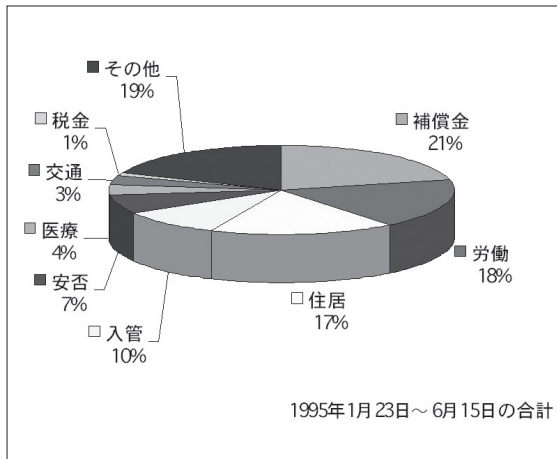
そういうのは一つの団体だけでは対応できませんので、ほかの団体に寄せられた情報も集めて、大体、総額で3000万円ぐらいの治療費が請求されているのではないかとということで、当時の厚生省に交渉に行ったりもしました。ところが厚生省の交渉の日は地下鉄サリン事件の日でした。私は朝いちばんの新幹線に乗って丸の内線で東京から霞ヶ関で下りるはずが止まらなくて、東京の地下鉄は快速があるのだなと思っていたのです。次の国会議事堂で全員下ろされて、上に行ったら消防車と救急車がいっぱいいて驚きました。

あの日はこの医療費の問題についての記者会見も用意していました。「日本は何てひどいのだ、こんな災害で治療を受けて、健康保険に入れる人は全額無料なのに、入れない親子が500万円を請求されている、おかしいではないか」と、CNNまで呼んで記者会見を用意していたのです。しかし、会見場にきた記者は二人、申し訳ないがあまりメジャーではないところが二人だったのです。もうがっかりで、どうなっているのだと思ったのですが、みんな地下鉄サリンの取材に行ってしまったのです。あの年は、私は震災には遭うわ、地下鉄サリンの地下鉄に乗っているわで、これで十分厄払いができたのではないかと思います。10年近くたって長岡にいたときまたも大きな地震に遭いました。

FEICの活動

次にFEICで受けた相談内容を説明します。図表5は半年間の全活動の内訳です。いちばん多かった相談は、補償金に関する相談です。補償金というのは、例えば、家が全壊した場合は一時義援金10万円、半壊では5万円で、その

外国人地震情報センターの相談内容



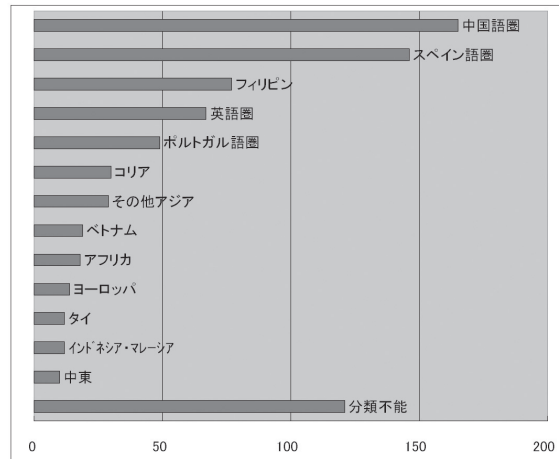
図表5

あともいろいろな義援金や弔慰金がありました。そういうお金の手続きについての相談事がいちばん多くありました。

次が仕事のトラブルです。阪神・淡路大震災は1月17日でした。日本は給料日が25日とか月末というのが多いのですが、極端な話、社長が死んでしまった場合に給料をだれが払うのか、工場がつぶれてしまった場合、雇用は継続されるのか、これは大きな悩みです。実際に賃金の未払いもありましたし、解雇もたくさん発生しました。工場が焼けてしまったら仕事はないですね。あるいは交通機関がストップして通勤ができないのでクビになった。これは日本人もたくさんありました。こういった相談も多かったのです。

次は、当然ですが、住居についてです。家がつぶれた、次の家をどうしようか。あるいは解約に関するトラブルです。賃貸住宅に住んでいますので、家がつぶれて次の家に移るときに解約をするのだけれども、保証金が戻ってこない。大家さんの家もつぶれてお金がないと言っている。どうするといったら、大家さんの家にある洗濯機を持って行っていいと言われたけれども、あの洗濯機は保証金よりどう考えても安そう。そんな相談が来るわけです。

外国人地震情報センターの相談者の内訳



図表6

そのほかでは、入国管理に関するものが多かった。神戸入国管理事務所がしばらく閉まっていたので、その間に在留期間が切れる場合はどうしたらいいとか、そんな相談もありました。あとは医療や交通安否というものがあります。

災害時の情報提供は、例えば、グラッと来たら机の下に逃げようとか、火を消そうとか、避難所に行こうといった一次情報が中心だと認識されることが多いのですが、多言語の対応が必要になってくるのは、むしろ長期的な場面だといえます。例えば義援金の申込書は、言葉が分からないと申し込みができません。ですから、直後の避難所も大事ですが、むしろ長期間に及ぶ避難生活や、生活の再建に必要なさまざまな手続きの多言語化が非常に大事ではないかと思えます。

あるいは、仕事の相談や住宅のトラブルにどう対応していくのかということです。こういう場面でこそ、それぞれの言葉による対応が必要になってくると思います。もちろん、災害直後も大事です。命あってこそ、次の家や仕事が探せるわけですが、長期間に及ぶ多言語対応が必要なのだということは覚えておいてください。

次に、どの言葉に関する問い合わせが多かっ

たかということについてお話しします。外国人地震情報センター（FEIC）の統計でいきますと、当時の相談でいちばん多かったのは、中国語圏のかた、次がスペイン語です。三番目がフィリピン語で、英語、ポルトガル語と続きます（図表6）。私は当時、時々スペイン語の電話や英語の電話を取っていましたが、相談内容の傾向が全然違いました。「外国人」ということでひとくくりにはできません。

例えば先ほどの義援金の話ですと、義援金が出ますというのが報道されますが、英字新聞などは日刊で出ていますから、その新聞を読んで、自分の家は半壊という人が、なるほどこういう手続きをしたら自分は5万円もらえるのだということを理解して電話してきます。今日、新聞で見たが、うちは半分壊れたから義援金の5万円をもらえそうだけれども、この手続きはどこでしたらいいのかという相談です。「区役所でできます」、「ありがとう」で終わるわけです。ところがスペイン語圏のかたの相談ですと、電話がかかってきて、「お金がない」、「どうしたの?」、「家はつぶれたし、お金ないの」、「家がつぶれたの? 全壊とか半壊とか、分かる?」という、「何それ」と言います。同じ被災地で同じ状況であっても、入っている情報は全然違いますから、例えば同じ相談の対応でも、まず家がつぶれたのか、つぶれていないのか、つぶれたならどのぐらいつぶれたのか、どこへ行けばそれが分かるのか、どんな手続きをすればいいのか。基本的にはこっちから聞き出して、答えていくという対応が必要になります。

外国人ということ一言では区切れませんが、同じ情報を多言語で出しても基本的な情報のレベルがそれぞれ違いますので、その多様性への配慮が必要です。非常に多様な外国人のかたがいるのだという認識がまず必要となってきます。例えば、中国語圏のかたは、在留資格が

非常に多様です。留学生のかた、中国帰国者のかた、そのご家族のかたでは情報のニーズも全然違うわけです。外国人といってもひとくくりにはできないのだということは覚えておいてください。

三つの壁

相談や内容の傾向をまとめると、三つの壁に分かれると思います。一つは言葉の壁です。最近言葉の壁というよりは文化の壁なのかなと思ったりします。ブラジルは大陸が安定しているので地震はほとんど起きない国です。ペルーは地震があります。地震のあるなしによっても全然違うわけです。

私は多言語の情報提供のツールづくりを今やっています。翻訳の用語をどうやってそろえるのかということミーティングしました。地震以外の災害についても翻訳をしているのですが、例えば「暴風雪警報」をタガログ語に訳すにはどうしたらよいか。フィリピンは雪が降らないですから、暴風雪はありえないわけです。この説明は大変なのです。地震がほとんど起きない国から来た人に、地震の前に伝えるのはまず大変だし、余震というのでも分かりません。こういう文化の壁も含んだ言葉の壁があります。

言葉の壁でいいますと、日本語で「危ない、逃げろ」と言われても分からないということもありますし。災害時にしか使わない日本語もたくさんあります。例えば「ふつう」という言葉は、日常使うのはノーマルの「普通」ですが、災害時に地下鉄が「ふつう（不通）です」と言うと、地下鉄が動いていませんという意味です。実際、テレビやラジオのニュースを聞いて「電車がふつうです」と聞いたので駅に行ってみたけれども、動いていないと電話をしてきた人がいました。災害時にしか使わないような日本語が実はたくさんあるのです。

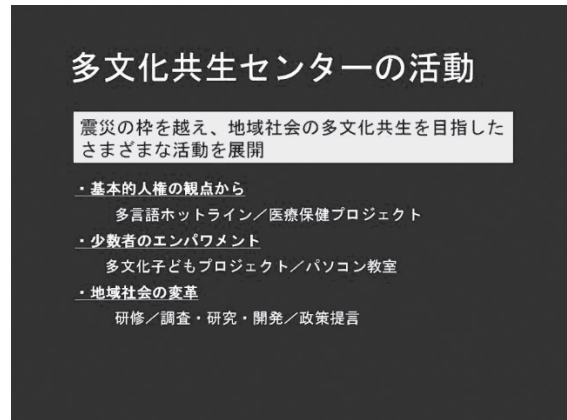
それから、制度の壁があります。先ほど言ったような保険の問題などです。外国人固有の課題にはあまり配慮されないので、結果としてこぼれてしまうケースがあります。

そして、心の壁です。地域に外国人がたくさん住んでいるということを多くの日本人住民が知らないで、ある日突然避難所に行ってみたら外国人がたくさんいて戸惑うわけです。この人たちはどこから来たのだろうか、震災とは関係ない人がご飯を食べに来たのではないだろうかと思ったりするのです。そうではなくて地元に住んでいるのですが、ふだん顔を合わせないので分からないわけです。そういったところから起こる偏見や差別もあります。

よく考えてみますと、これらは災害だから起きるといよりは、日常ある壁です。言葉の壁も制度の壁も心の壁も、ふだんからある壁ですが、災害が起きるとより高くなるのです。ふだんからこの壁を低くすればよいというのが、阪神・淡路大震災以降、阪神間で取り組むボランティア団体がやってきたことだと思います。

兵庫県も神戸市も地元のNPOも含めてですが、今でも災害時対応はほとんどやっていません。さぞかし神戸市は進んでいるのでしょうかとよく言われるのですが、正直あまりやっていません。どちらかというとも日常対応に重点を置きました。これは反省点でもあるのですが、日常の壁を低くしないとだめだという認識でこの10年間やってきました。

多文化共生が何なのかというのは議論が分かれるところだと思います。3月7日に総務省が多文化共生推進プログラムというものを発表しました。私もメンバーの一人として作成にかかりました。反響がありましたが、マイナスの反響です。なぜ政府が多文化共生なんて、よく分からない言葉を使うのだというものです。そ



図表7

れと戦っていかないとはいけません。総務省が勇気を振り絞って多文化共生と言ってみただけです。法務省は出入国管理の強化だけで300億円もの予算をつぎ込むそうですが、なぜ同じ額を総務省はつぎ込まないのかと思いますが、つぎ込めません。今回のプランも地方交付税で措置するとは書いていないのです。

我々の多文化共生センターでは「基本的人権の視点」「少数者のエンパワメント」「地域社会の変革」という三つの柱で活動を進めてきました(図表7)。現在5か所(大阪・きょうと・ひょうご・ひろしま・東京)で活動していますが、3月までがこの体制で4月から5つの独立した組織として再出発することになっています。東海地方には多文化共生センターはありません。今後5か所に独立していきますので、かつてに名乗っていただきたらと思います。

災害時のニーズは時系列で変化する

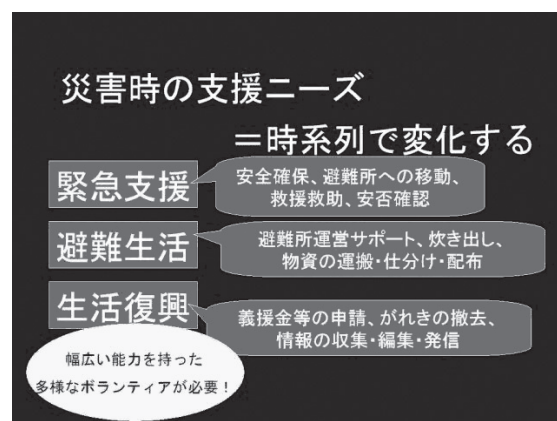
ここからまとめです。災害時のニーズは時間とともに変化するということです(図表8)。阪神・淡路大震災もそうですし、新潟中越もそうだったのではないかなと思います。時間で追いかけていきますと、緊急支援の場面と避難生活の場面と生活復興の場面に分かれます。緊急支援は、まず安全の確保です。逃げてください、

津波が来るので高台へ行ってくださいというものです。あるいは避難所はどこかということをしかり伝えるようなことです。安否情報なども入ってくると思います。

避難生活では、避難所で言葉が分からない人がいる場合は運営上、いろいろな配慮が要りますので、その辺のサポートが必要です。避難生活は皆さん一泊二日ぐらいのつもりでいらっしゃるかもしれませんが、避難所に行かなければならないような災害が起こった場合、少なくとも1週間はそこで寝泊まりするのだと思ってください。そう思って、地元の避難所をもう一回見てください。あそこで1週間寝るのは危険です。死にます。阪神・淡路大震災では避難所で死んだ人が500人です。新潟中越の場合は、死者の半分以上が避難生活で亡くなっています。避難所のクオリティーをどう上げていくのかというのは、外国人に限らずですが、日本政府全体の問題ではないかなと思います。

ようやく今年度、内閣府が避難所のQOL (Quality of Life) という言葉を使って、避難所での多様な避難者への配慮ということをやっと言い出しました。11年かかってです。阪神・淡路で500人も避難所で亡くなっているのに、10年間何をしていたのかと思いますが、やっと新潟中越を踏まえて政府としても避難所のQOLということを言い出しました。

例えば、宗教上の理由があって食べるものに制限があるかた、アレルギーのかたも同じですが、こういうかたへの対応は現在のところほとんどないわけです。最近、便利になり、お湯を入れるだけで五目ご飯ができるようなものがありますが、あれは困るのです。何が入っているか分からないのです。「アミノ酸加工物」などと書いてあるのですが、豚が入っているかどうか分からないわけです。炊き出しなら分かります。何が入っているのですかと炊き出しをした



図表8

人に聞けばいいわけです。

こういう配慮が特に外国人のかたの場合は必要になってくるということです。それから長期間の部分は先ほど申し上げたようなことで、いろいろな手続きの場面で多言語の対応が必要になってくるということです。

こういったことを例えば市役所の防災課の職員一人でやるということは無理です。あるいは国際課に通訳を3人雇用しているから全部やれるかということ、絶対に無理です。結局、多様な人のサポートをどうコーディネートしていくのかということが大事になってきます。それは阪神・淡路大震災のときに私たちが身をもって経験したことです。

災害発生時の具体的な対応

ここでもう少し具体的にお話ししたいと思います。まず一つめ、被災時の状況を振り返ってみますが、阪神・淡路大震災では、ふだん外国語で生活している人が2万人ぐらいたということです。何が起きているか分からないということがまずありますので、そこへ正しい情報を伝えるということです。名古屋大の岡本教授らのグループでも作っているような情報は、こういう場面で非常に有効になってきます。

私はフィリピンの相談者のかたから、クーデ

ターが起きたみたいだという電話を受けたことがあります。なぜなら家は壊れて、どうも爆撃されたようだし、軍隊がうろうろしていると言うのです。それは自衛隊のことです。何が起きたか分からないのです。

先ほどパニックになるという話がありまして、今もう一度、災害時情報の研究をいろいろ読み返しているのですが、災害時、特にパニックに陥ると、人は大体、小学校4年生ぐらいの知能レベルになるそうです。例えば火事で亡くなった人のようすを見ていると、玄関で亡くなっている人がけっこう多いということなのです。かぎの開け方が分からなくなるのです。あるいは、よくありますが、ここから飛び降りたら死ぬというところでも飛び降りてしまうということがあるそうです。頭が真っ白になります。

阪神・淡路のときから仲よくしているNHKに勤めているフランス人がいますが、彼はふだん日本語をぺらぺらしゃべっているのですが、災害時には真っ白になったと言いますね。ほかにどういうときに真っ白になるのという浮気がばれたときとか言っていました。日本語がただどどしくなると言っていました。真っ白になるのです。留学生のかたはふだん授業を日本語で聞いているから日本語は大丈夫ではないかと思うかもしれませんが、パニックになったら、やっぱり真っ白になるのです。ふだん日本語で生活しているような人でも真っ白になるわけです。

ですから、例えば留学生は日本語が分かるから大丈夫だろうと思っても、彼らですらも分からなくなるのです。表示を見て、普段ならばわかる平仮名でも分からなくなるのです。玄関のかぎの開け方が分からなくなるのです。そして人が死ぬのです。ですから、日本語をふだんしゃべっているから大丈夫だろうという想定

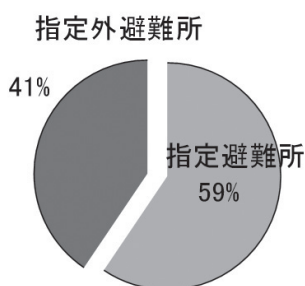
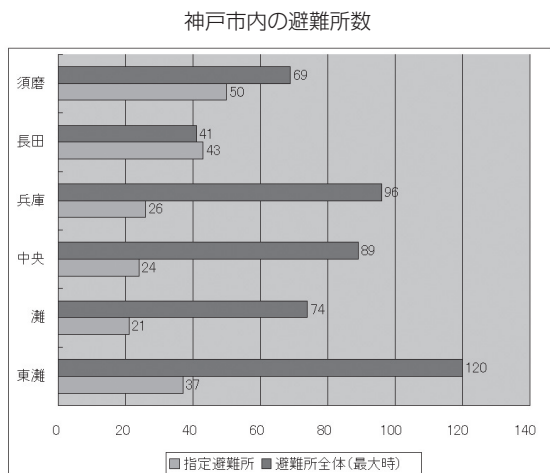
はできないということです。それが一つです。それぞれの母語で情報提供すべきだと思います。

それから、当たり前のことですが、避難所はだれが使ってもいいのだということです。災害救助法は「住民に対して適用しなさい」と書いてあります。住民とは生活の本拠を置く人と書いていますので、国籍条項はありません。ですから、災害時の対応は国籍に関係なく提供しなければならないし、国籍に関係なく避難所に行つて物をもたらっていいのです。これを徹底して伝えることも大事です。

それから、被災者の情報の把握になりますが、阪神・淡路大震災のときは規模が大きすぎて無理でした。新潟県中越地震のときは3日後ぐらいのときに、避難所を回って人数把握に努めました。これは本当に素晴らしい、阪神・淡路大震災ではできなかったことです。

阪神・淡路大震災のときの神戸と新潟県中越地震のときの長岡とデータを較べてみますと全く同じで、もともと指定されていた避難所が大体、全体の6割で、もともと想定されていないけれども、災害時に人が集まったのでやむをえず避難所にしたというところが4割です（図表9）。つまり、今、防災計画に書かれている避難所は全体の6割なのです。そこに行く人はどんな人かという、大体、地元詳しくて、最初にあそこが避難所だと分かる人がさっに行くのです。大体、避難所のキャパシティはほとんど想定が甘いのです。全員が避難したらたちまちパンクします。

小学校の運動会の写真を撮る場所だけでも取り合いになるのです。学校に通っていない人も小学校に来るのです。入れるわけがない。地元の人が最初に入ります。そして、あふれるのです。行ったけれどもいっぱいだった。そういう人たちはどこに行くかという、とりあえず知っている公共の建物に避難してきます。そう



神戸市全体の避難所の内訳

図表9

いうところはあとから追加で避難所として指定されるのです。

長岡市役所の1階もそうでした。図書館もそうでした。神戸でもそういうところがたくさんありました。そういうところに外国人のかたが避難されるケースが、ほかと比べると多いということです。神戸でも何か月にもわたってベトナム人のかたが公園でテント生活をしていました。あれは閉め出されたのではないかという人がいますが、ベトナムも地震がないところなので、屋根のある建物に入りたくないのだと言ったのです。それでテントで生活を続けることにしたのですが、そこも指定外避難所ということになります。

さて、避難生活では長い期間を避難所で生活することになりますが、災害直後はいろいろなメディアを使って情報提供をすることになりま

す。その後、避難生活時の情報提供は避難所が核になると思います。避難所に行けば情報があるのだということを、私たち日本で生活をしている人は知っているかもしれませんが、海外から来た人は分かりません。避難所というのは家をなくした人が行くところだと思っているかもしれません。行けば情報があるのです。ですから、情報のコアセンターなのだという認識も必要になってくると思います。

情報伝達でいいますと、阪神・淡路大震災のときは携帯電話やインターネットといった便利なものはほとんどありませんでした。新潟中越地震のときは通話が集中して、携帯電話が通じない時期もありましたが、それでも様々な場面で活用されていました。私が避難所で本当に印象的だったのが、コンセントの周りに携帯電話の充電器がたこ足のようにになっていたこと。よくこれで火が出ないなというぐらい、みんな携帯電話を充電していました。阪神・淡路大震災のときは、ほとんどの人が携帯電話を持っていなかったのが仮設電話に行列でした。そういう情報伝達のメディアも10年たつて随分変わったという印象があります。

阪神・淡路のときは避難所生活が長かったので、ちらしの手配りが重要な情報ツールでした。新潟中越の場合は、1週間～10日ほどで皆さん自宅へ帰りましたので、帰ったあとにどうやって情報を届けるかが課題で、ラジオでの情報提供を次に話をする羽賀さんのところを通して、神戸のラジオ局と共同でやりました。あるいは携帯電話の文字情報のサービスも行いました。

最後に災害時の情報提供ツール整備についての最近の動きをお話しします。自治体国際化協会という総務省の外郭団体があり、私はこの1年間、参事という肩書きで災害時の情報提供のツールをまとめてきました。横浜市が作った避

難所の表示シートを全国どこでも使えるようにしようというものです。4月に発表予定ですが、6言語でいろいろな文例の翻訳をして、避難所で表示できるものを作ったり、携帯メールで多言語情報発信ができるようなものがまもなく完成します。

音声情報では、ラジオだけではなく、防災無線やコミュニティFMで使えるような音声のデータベースを作っています。これは6月ごろに全自治体にCD-ROM入れたものが配られる予定となっています。自治体の数が「平成の大

合併」で減りまして、4月には全国で1800になるそうです。1800の自治体全部に配ります。ですから、6月以降は自治体国際化協会で作ったものが全ての自治体に配られますので、多言語にするのは難しいからできないという言い訳は通じないようになります。このツールを使えば、基本的な避難誘導までの情報提供はできるようになります。そういうものを長岡の協力も得て1年間をかけて作りました。これらのものを使って、多言語による情報提供を全国でしっかりやっていただければと思います。

「新潟県中越地震で私たちがやってきたこと ～日本の常識は世界の非常識？」

羽賀 友信（長岡市国際交流センター）



何が起きたか・何をすべきかを把握する

私は昨日まで約3週間、中東の砂漠におりまして、頭を傾けると砂が出そうな感じです。実は私は今回また被災者になりました。砂漠の奥にいたときに、ガザの入り口のファラの近くを通過してカイロのほうに戻ろうと思いましたが、イスラエル軍がものすごい勢いで走って、特殊部隊が動いています。

一体何が起きたのだろう。私の車も止められて動けない。止まれと言われて、銃を突きつけられます。いちばん怖いのは何が起きたか把握できないことです。「自分に一体どういうことが起きていて、何をしたらいいのか」が分かることは非常に大事だということを、もう一度自分の身をもって感じました。

実は、3年前も同じところで同じ経験をして

います。イラク戦争に巻き込まれたのと同時に、砂嵐にも巻き込まれて、一体何が起きたのかさっぱり分からない。特に軍事に関しては情報がすべて隠蔽されてしまうため、質問しても答えがかえってこない。軍事検問で全部止められる。何をしたらいいのか分からない。ですから、私は自分の体験を通して、「何が起きたのかを把握できる」ということは非常に大事だと思うのです。

最初に中東の話をしてしまいましたが、新潟で地震が起きたときもそうだったのです。実は地震が起きたときに、私は「東京がなくなった」と思ったのです。長岡でこれぐらいの揺れだったら、東京は壊滅したと思って、ラジオを引っ張ってきたのです。するとなんと長岡が震源地でした。周りを見たら、先ほどの田村さんでは

ないのですが、うちの職員は全部パニックです。直立不動でぼうっとしているのです。だれも動けないのです。田村さんは小学校4年生と言われましたが、私は幼稚園ではないかと思いました。でも人間とはこんな存在なのです。

中越地震は三次元災害

今日の講演では、最初に岡本先生からツールについての話がありました。次に、田村さんから、阪神・淡路大震災についてのお話がありました。阪神・淡路大震災は、都市型の災害です。私はこの災害は二次元災害、面の展開だと考えます。都市ですと、災害が終わった時点でどこからでもアクセスが利くからです。ところが、長岡は中山間地型で、日常からアクセス道路の非常に少ないところ。皆さんは、新潟県中越地震から1年半がたって、だいぶ復興しただろうと思っておられると思いますが、山古志村もまだほとんど帰っていません。なぜならば、山が崩れたからです。復興というのは山を戻して、復旧道路をつけて、それから家屋の復旧が始まるわけですから、その山すら戻っていない

ということで、皆さんのほとんど、まだ8000人近くが避難所暮らしということです。このような災害を、私は三次元災害と呼んでいます。

新潟県中越地震の前、7月13日に長岡は水害でやられました。7・13水害です。そして10月23日の新潟県中越地震。さらに、地震によって道路が寸断されて入れない地域で、今度は雪害で家々がつぶれてしまいました。1年間で災害対策本部が3回立ったというのは、歴史上、初めてです。ですから、半壊であった家が全壊に変わってしまう。ところが国は雪害によって家屋被害が変わっても補償してくれませんでした。神戸と違って、雪国では圧倒的に雪の力が強いのです。皆さんがご存じの雪害というのは、まだ2～3歩手前のいいところだけをテレビで見ているのです。その奥に5m、吹きだまりで10mという積雪のところ、高齢者が住んでいるわけです。そういうところで、もしあの冬に地震が起きたら、雪崩も含めて、ありとあらゆることが起きる。特に私が心配したのは、仕事柄もありますが、外国籍のお嫁さんがそういうところで孤立をされているケース



会場風景

が非常に多いということでした。

私はもともとは国際協力の現場で、70年代から中東で難民問題をやっていました。そのあとは、緒方貞子さんと一緒にカンボジアで難民の医療支援をして、そのプロジェクトが今、国際緊急援助隊になっています。長岡は、皆さんがご存じのように、小さい町です。人口が20万人に満たない小さい町だったのですが、ようやくこのたび合併で二十数万人になりました。外国籍のかたは2000人ちょっとです。こういうところが実はいちばん難しいのですね。岡本先生がおっしゃった、あのツールに届かない町なのです。

長岡市国際交流センター

長岡市国際交流センターは、今から4年前にできました。このセンターがあったからよかったです。それがなければ、どこの国のだれがどこに住んでいて、どんな状況にあって、どういう手助けをしたらいいのか、長岡は対策がゼロだったと思います。それが中山間地といわれる日本の7割を占める地域の状況だと思っています。災害はどこで起きるのかわかりません。そのときにそれを指揮する組織があって人間がいるのかということは非常に大事だと思います。

私が長岡に久々に戻って国際交流センターを作ろうと思った一つの理由は、自分のボランティアで賄える量ではどうしようもないということです。さまざまな情報を受信したら発信をしなければいけません。これが一元的にできる場の確保は非常に大事です。防災というのは日常の拡幅です。それは先ほど田村さんからも出たのですが、いいことも悪いことも災害が起きたときにすべて拡幅されて広がります。いい関係の人はいいネットができますし、亀裂が少しでも入っていれば、災害によって大きな亀裂になって関係など崩れてしまうということです。

国際交流センターを作ろうと思ったもう一つの理由は、このような試みにたいする行政の支援です。行政にも非常に温度差があります。防災に対して当事者意識をもっているところであればあるほど支援をしてくれるわけですが、自分が当事者になるという考えをお持ちのかたは非常に少ないのです。私もいろいろな自治体に呼ばれますが、私や田村さんと呼ばれるところは非常に前向きのところだと思います。それは数えられるほどしかないのです。それ以外は多分、何の対策もとられないと思います。

長岡市の国際交流センターを作ったときに、私はがく然としました。外国人のための防災マニュアルが何もなかったのです。いったん事が起きたときにはどうするのだろうと思いました。自分の中には緊急性というものはいつもテーマになっていましたので、自分なりに作りました。こうやって少しずついろいろなものができあがっていきました。

ジャーナリズム災害

今回の災害で、私がもう一つの災害だと思ったのは、ジャーナリズム災害です。外国人に対して長岡で対応できるのは市の広報ではなく私一人だったので、ジャーナリストから私のところに問い合わせが来ます。でもまさか私も、NHKが300人も入ってくるとは思わなかったのです。一つの部門が問い合わせをすれば、その資料をみんなで使ってくれるのだろうと思ったら、同じNHKのさまざまな部門から猛烈な数の問い合わせが来るのです。天下のNHKが取材してやるのだから、答えるのは当たり前だと言わんばかりです。この会場にNHKのかたはおられませんね（笑）。日ごろは仲よくしているのですよ。

緊急時にシステムは機能しない

もう一つ、私はいろいろなところで相談を受けるのは緊急時のシステムについてです。私はシステムなどはあってないようなものだと思います。なぜならば、人がいてはじめてシステムは機能するのですが、しかしまず職員がまず来られないということです。これはうちの職場でもそうですが、13人しかいない職場の2人が全壊で家から出てこられない。法事で出ている者は山の道が崩れて帰ってこられない。出張で出ている者も帰ってこられない。そうすると、来た人でシステムを立ち上げることになります。このときシステムのすべてを指揮できる人がいなければなりません。

もう一つ私が大変ショックを受けたことがあります。日ごろから外国人支援のボランティア組織がありましたが、駆けつけたかたはなんとゼロでした。当たり前です。自分の家が壊れているのに駆けつけるボランティアはいません。いろいろな都市で私は相談を受けて、外国人支援のためのボランティアに、私が最初に言うのは、そのボランティアも被災者になるということをお忘れなく、ということ。そうすると何が大事かという、隣町が実はいちばん大事なのです。日本の被害はそんなに拡大して出ませんから、被害の中心地を除いた、ちょっと離れたところからはすぐ入れるのです。

バイクによる情報収集

あと強調しておきたいのは、この地震でバイクが大活躍したことです。

地震の前、神戸のFM わいわいさんと長岡のFM ながおかをつないで打ち合わせをしていたこと。実は、私は、50歳を過ぎてオートバイの免許を取りにいったのです。事が起きて、道路が崩れたら、オフローダーで走るしかないなと思ったからです。「地震のた

めにオートバイを買った？」とみんなにあきられました。「50歳過ぎて転んだらどうするの？」。自動車教習所では、「お年ですから転ばないように気をつけましょう」と言われました。しかし、そのバイクは地震本番で猛烈に活躍したのです。

地震の後、田村さんがすぐ電話をくれたのですが、その前に私は現場に行ってきました。バイクは非常にいいです。道路が全部落ちたところを、私はバイクで走っていったのです。普通のオートバイやスクーターは段差があったらだめです。車は、長岡は夕方に起きたので、みんなパニックになって家に走っていったわけです。しかも、パニックになると100キロぐらいで走っていくのですね。それで段差が見えないで、4輪バーストです。その車が全部捨ててあるわけですから、それを撤去するまで車も走れない。でも、バイクであればすり抜けて走れます。

こんな風に、私はバイクで現場を見てまわったのですが、びっくりしたのは、NHKですらも、そこに入っていなかった。「被害がない」という情報になることです。「被害があった」と言うところだけが被害があったことになって、報道がないところは被害がないことになってしまうのです。でも実は、何も情報がなかったところがいちばんひどいところだったのです。

私はバイクですべて走ってみました。そうしたら、報道の者と自分のすり合わせが全然違うのです。私は地理も分かりますし、日常的なおつきあいの幅の中でいろいろなことが分かるので、独自の対応ができるわけです。その状況の把握というのが、第一報として非常に役に立つということです。震源の把握もでき被災地外へと発信される「外へ向かう情報」として有用です。しかしその後、地元にとっては「内に向かう情報」が非常に大事になってきます。ですか

ら、コミュニティの中の情報、例えばどこに行けばいいとか、食事がどうだとか、本当にその地域限定の情報です。この外へ向かう情報と内へ向かう情報の二つの方向をどういうふうに確立するのかということが非常に大事です。

ネットワークが大事

私が今回、非常に助かったのは、田村さんと顔が繋がっていたことです。国際交流と協力の実践者全国会議というのが、実は昨年までで3回持たれたのですが、そこにうちも参画していたのです。そのときに全国のネットワーク化ができていて、それがなければ長岡は本当にお手上げでした。まず一体どこにどういう能力が眠っているのかすらも分からない。それから、先ほど岡本先生が紹介して下さった、ああいいうツールに届かないわけです。

もっと怖いのは、私の電話は地元に対応するだけで精いっぱいなわけです。まずジャーナリストからの対応が猛烈です。毎日平均三十何社

の新聞社が来ます。それにNHKを含めたテレビ局が来ます。そのほかに個人的な相談がどんどん来るわけです。そうすると、全国と被災地をどういうふうに結ぶか。

皆さんにお渡しした資料のいちばん最後を見ていただきたいのですが、これは田村さんと会った瞬間に立ち上げた緊急時の三角ネットで、そのまま使っているものです(図1)。在住の外国人の被災者、支援する我々はともに被災者であるというベースから始まるのです。そこからどういうふうに全国に結ぶかというのが、ちょうど三角形になるということです。このいちばん大事なことは、実は私には全国を個別に結ぶ力は時間的にもない。それを一元化してくれるコーディネーターが必要です。田村さんは私から言ったことだけにこたえてください、私は田村さんから来たことしか受けないということで、一元化してもらいました。ですから、情報の混乱がないのです。

私はリクエストだけ上げていったので、田村

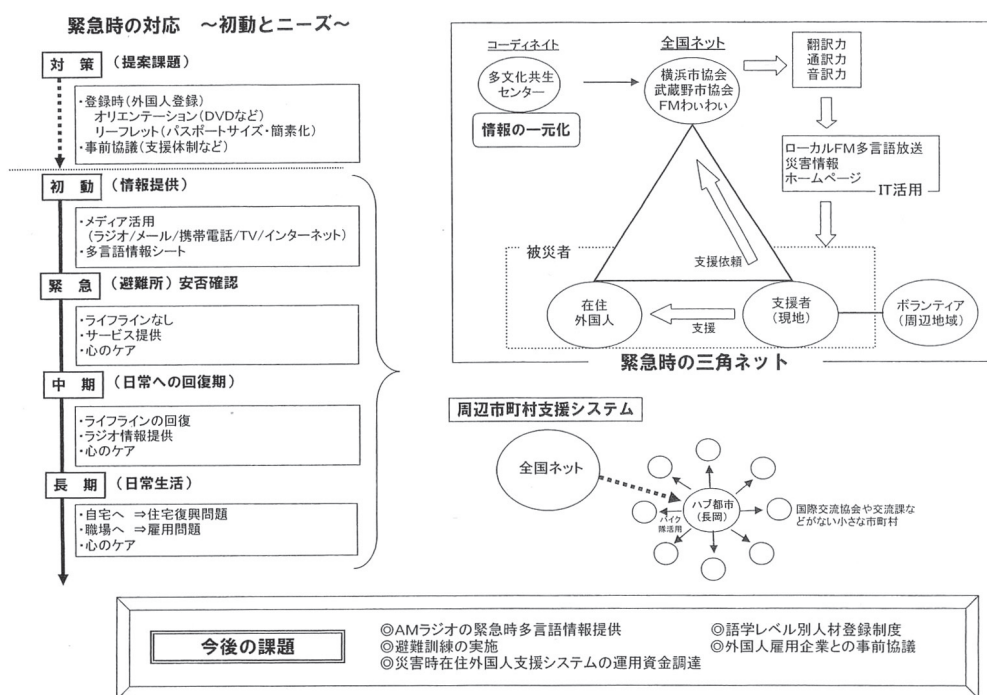


図1 緊急時の対応 ～初動とニーズ～

さんがどれぐらいそこで苦勞して全国をまとめてくださったか知らなかったのです。後ほどNHKに全国を一斉に取材してくださいと私が言ったら、こんな形で皆さんがバックアップをしてくださったということが初めて分かったのです。うちでは原稿だけを日本語で起こします。それを翻訳してもらおう。そうすると、緊急性のあるところはここ、それから1～2日遅れても大丈夫なところはここ、音訳はここと、全部違うのですね。

横浜からは9か国語の表示シートをもらいました。青森からは弘前大学の佐藤先生のところから、分かりやすい日本語を頂きました。これが実は大事なのです。田舎に行けば行くほど、言語が英語に特化していくのです。国際イコール英語という勘違いをされていることが非常に多いのです。これは世界共通の言語ではあるけれども、母語としては違うのです。英語圏から来ているかたは、大体いろいろなメディアを活用できる能力を持っています。それから、日本語もかなり長けた人が田舎に入るので、そんなに問題はないのです。特に日本人は白人系にはちやほやしますので、日ごろから大事にしているとか、そういう関係で人間関係が構築されているわけです。

コミュニティの活性化

いちばん困るのは、同じ国籍の人たちでも全然違う住み方をしていることです。例えば中国のかたは、研修員はほとんど個人で来ておられるわけです。子どもさんも高齢者もいません。ところが残留孤児でもって帰ってこられたかたたちは、親戚一同全部おられますから、高齢者の問題もあるし、子どもの問題もあります。ブラジルのかたは特に大きな家族・親戚があります。ですから、どういうビザステータスでこの人たちがいるかということは、最初に把握すべ

きいちばん大事なことです。

それと同時に、地震が起きると、集住地域もへったくれもないですね。どこへ行ってしまったか全く把握ができません。私たちも大体は把握していたのですが、実際に事が起きたらどこにもいない。田村さんがすぐに飛んできてくれて、一緒にどういう計画を立てようかということで始めたのが、「避難所が一体どこにできたのか」を把握することでした。先ほど「6割が規定の避難所」というお話がありましたが、長岡の場合も全く同じケースでした。規定の避難所にいない残りの4割の人は、そこに人がいて、建物が壊れていなさそうだったら全部入るので。私がぎょうてんしたのは、いちばん快適でよかったのは「農家のビニールハウス」だということでした。300人入るのです。しかも、もともとビニールハウスでは寒いときにはストーブをたくのでストーブもある。そして、みんな顔見知りが入る。認知症の高齢者も入るわけです。そうすると、復興して家に戻ったり、仕事場が回復したときに、2～3人が残ってまとめて面倒を見てもらえます。地域の力というのはすごく強いのです。

ところが、ここには外国の人は入りづらいという逆の面もあります。実は私が長岡に来て驚いたのは、長岡にはボランティアという言葉が全然定着していなかったことです。私が国のボランティアで79年に初めてカンボジアに出たときは、私はヒッピーと呼ばれたのです。まだNGOという言葉がないのですね。よほど物好きで海外が好きな者が流れていったという認識です。

田舎でのボランティアのとらえかた

私の世代は、今、日本のトップでいろいろなことをしている人が多いのですが、みんなヒッピーと呼ばれます。田舎では、ボランティアを

しているという、よほど物好きで暇な人という見方なのです。ですから、ボランティアのかたが来てくれても、田舎の高齢者は何も頼まない。頼み方が分からない。「お互いさま」という言葉にしておけばよかったのです。

だから、あまり活字でやるのは私は好きではないのです。日ごろのまちづくりになぜこんなに高齢者が分からない言葉をいろいろ入れるのでしょうか。「お互いさま」という言葉で定着させておけば地元の文化として使えるのですが、ボランティアというとはそれは何なのだという高齢者が多いです。

ボランティアのかたが来てくれて、一生懸命してくれると、かわいそうにそんなものを食べてと自分の食べ物を分けてあげるわけです。それはすごくいいことだと思うのですが、ただ、いい意味で閉鎖性が内に向かいやすいのです。そういう田舎に、ボランティアのかたが入るとするのは非常に難しいのです。ましてや、外国の人がそこにいれば、人間として見られる前に、何人であるところで引かかるのです。私は日ごろ変人といわれて、その枠外にいますが、大事なことは、それぐらい超えてしまえばいいのですが、寂しい思いをされるかたが実はこういうときにより寂しい思いをするのです。

通訳業務ということも先ほど出ていましたが、いちばん大事なことは文化的な背景を我々がどれぐらい把握して、日常的な活動に下ろすかです。近ごろでは国際交流協会なんか要らないのではないかと全国的な声が出るのですが、私は逆だと思います。やはりいい出会い、いい交流をしなければ協力は絶対に起きないのです。この協力のかなたに何が生まれるかというと、コミュニティの活性化です。こういう、人を活かして自分活きるという社会的な概念を持った人のコミュニティは、私は非常に強く活

性化されたい町だと思うのです。そういうまちづくりをテーマ化していない町は、私はこれからは生きていけないと思うのです。

長岡の場合は外国籍のかたが非常に少なかったですから、まだよかったのですが、これが大きな都市では、暴動につながるかもしれません。それは日ごろいいおつきあいをしていなければ、全くつながらないからです。日本人どうしもつながらない。ましてや外国のかたはつながらない。

私は防災のいちばんの基本は、「だれを思い出すか」につきると思うのです。ですから、日ごろいいおつきあいをしていなければ、これが日常化して、文化として定着していなければ、決して緊急時に立ち上がることはないのです。やはり向こうのかたも、あの人を頼れば生きていけるという概念で来てくれるわけですから、日常の中の交流というのが猛烈に大事なことです。

異なる文化の理解

もう一つ大切なことは、相手が持つておられる文化的な背景を、私たちがどういうふうに理解するかです。私のところでも幾つかの例が生じたのですが、いちばん大きかったのは中国のかたです。中国のかたが私のところに何人か相談員でおられます。しかし緊急時にはだれも出てこないのです。どうしたのと言うと、「羽賀さん、中国人はほうっておけばいいのです」と言います。中国人は事が起きたら自分以外は信用するなという哲学で生きているからだということです。

もっとびっくりしたのは、避難所に入っていたら何が起きたか。毛布の独り占めとおにぎりの独り占めです。おにぎりを座布団にして座っているのです。これでまたもめるわけです。「やはり中国人は」と言われてしまうのです。

偏見ですね。大変なことになって一触即発状態です。私が走っていったことは、両方を集めて、「この人たちが持っている文化は自分一人で生きなければいけない。だから今、とりあえず自分で確保して生きていこうという考えの文化です。でも、日本はみんなで共有して、ちゃんとあなたも同じ人間として均等に扱うから大丈夫ですよ」と双方に説明したのです。この通訳がいちばん大事だと思います。これをして初めてうまくそこが収まって、ボランティアをしていただいたら、日本人の人たちも打ち解けたのです。言葉が通じないということは、相手をかけて否定して、偏見を持ちやすいということです。

もう一つは、実はご多分に漏れず、長岡も私立大学の学生数が少ないので中国の留学生をたくさん入れておられます。何が起きているか。やはり中国のかたたちはああい地震のときにごく困るわけです。地震を知らない。ブラジルのかたも知らない。ブラジルのかたは私のところに来て、地球が壊れた、世界が壊れたと言うのです。私は震度6、震度7というと、頭に大体のメジャーがあるわけですが、それが無いのです。受けた衝撃の強さは文化的なバックグラウンドで決まります。ですから、感情の豊かな国ほど受ける衝撃は大きいのです。

もう一つは、中国のかたたちは自分一人に対応していこうとする。中央図書館というのがあり、ここは避難所になっていなかったのですが、あまりにも人が集まったので、館長が中に入れてくれたのです。アパレル関係の研修員が100名、留学生が40名、それから、近所の高齢者と子どもたちが入ったのです。実はこれもいろいろあったのですが、不安の解消ということを皆さんはやります。日本人は黙って耐えます。中国のかたたちはけたたましい中国語で一晩じゅう話します。ブラジルの人は踊っていま

した。これは全部、自分の不安の解消なのですね。ですから、是々非々ではなくて、それが自分がいちばん落ち着くいい方法です。私のところに「ブラジル人って一体何なのだ。夜中にラジオをかけて踊っているぞ」と言ってきます。私が聞いたら、不安でじっとしてられないということなのです。こういうことはなかなか分からない。

もう一つは、中国のかたたちが実は今の日中関係がこういうときに響いてくるのです。中国のかたお二人が悪意を持って、それと軽い気持ちで中国大使館にちょっとしたメールを飛ばしました。それは、彼らが一晩じゅう騒いで、一晩めは日本人はみんな我慢したのですが、高齢者や子どもが多かったことで寝られなかったのです。それで、館長さんに静かにするように言ってくださいと言いました。そこに入れてくださったかたですから、館長さんは非常に人格者で、「きみたち、静かにしてくれないか。そうでないとここにいられなくなってしまうから」と言ったら、「出ていけと言われました」というメールを大使館に送った。それで総務庁を通して、県庁を通して、長岡市を通して、私のところに振ってきたわけです。出ていけとはなんだと。これにだれが食いつくか。ジャーナリストです。

いい話というのは百話に一話あるとスパイスが利いていいのですが、日常的にあると記事にならないのです。だから、マイナスの要素をかき回っているのです。ですから、ジャーナリストの認識が私はこの地震をきっかけに非常に変わりました。昔は、社会のためになかなか大した人たちだと思っていたのですが、このごろはあまりよく思いません。当時は腹が立ったということです。それを前面で書かれたら何が起きるか。全国から一体長岡で何が起きているのだという問い合わせの山です。それに対応

するだけで我々はパニックです。ジャーナリストというのは非常に無責任な人と、しっかりと我々をサポートしようという人と二つあります。ですから、ジャーナリストの問題は窓口がしっかりしないと、本当に地震より大きい山崩れを起こします。いちばん大事なことは、そこにいる人たちがどういうコンセプトで外国人支援に対応していくかということを作っておかなければいけないということです。

支援システムは人だ

それから、我々はいろいろな意味で外国の人たちに手が届きません。皆さんもきっと災害が起きたときは、あの人、この人と数人にしか手が届かないと思うのです。そうすると何をするか。職場があるのだったら、職場単位でやってもらうことです。それから留学生です。留学生から何件も夜中に電話が来ました、「羽賀さん、助けてくれ」と。学長に電話したかということ、学長は出張でいない。事務長もいない。休みでだれもいないのです。それで結局、私のところに来たのですね。私は夜中に走って行って、彼らをまとめているいろいろやったのですが、大学が動いてくれたのは2日後です。

もっとびっくりしたのは、その留学生の言語能力の高さをふだんから私は知っているので、ボランティアにお願いに行ったら、彼らの身の危険という理由で、留学生は使ってくれるなということでした。非常に残念だったですね。それが使えたら、どれぐらい役に立ってもらえたか。でも、彼らも隠れているいろいろなところへ手助けに行ってくれたのです。それは何人^{なにじん}だからではなくて、人として日ごろお世話になっている高齢者のところに逆に入ってくれました。

ただ、私のところみたいに小さなところだと、本当に特殊な能力を持った集団をどう確保するかということは、ものすごく難しいのです。田

村さんのところと一緒に、実は国際交流センターというのは日ごろ非常にいいところにあるのです。1階で通りに面しています。私のところは毎日たくさん人が来て、帰れというぐらいです。それが、地震のときはビルに亀裂が入って使えなくなりました。ですから、残念ながら日ごろだれも寄らない市役所へ行っているわけです。みんな困ったわけです。「羽賀がいないぞ」、「あいつ、どこへ行ったのだ」。古いビルなので電話の転送もできなかったのです。ですから、電話は鳴りっぱなしでも人が入れないわけです。そういういろいろなことが起きるので、この拠点づくり、場の確保ということは日常、非常に大事です。

何度も言っていますが、いちばん大事なことは人が有機的につながることです。支援システムは物でも道具でも何でもありません。人です。カウンセラーがどうかということもあるのですが、それはすべて中長期的なところからしか出ません。信頼できる人間に心を吐露して、それを受け止めてもらうことが、ボランティアのいちばん大きな役割だと思います。ですから、私のところで最初にやったのは、ローラー作戦で避難所探しに行きました。うちの職員、来てくれたボランティア全部で、片っ端からそれらしいところに行ってみたのです。そうしたら、十数か所に外国の人がおられる。昼間行ったらいないのです。不思議に思って、彼らが勤めている会社へ電話したら、休職状態にさせてありますとおっしゃったのですが、実は働かせていたのです。そういう事実はいっぱい出てきました。

それから、中国の研修員が全部消えました。避難所に行ったら、100人単位でアパレル関係の社長たちが守ってくれています。それは外から見ると守って通訳がついているのですが、実は逃げられないように囲い込みをしているので

す。ですから、彼らはトイレに行った瞬間にうちの通訳さんに泣きながら話しているわけです、「帰りたい」と。帰られたら地場産業が傾くのです。これも非常につらいところなのですが、そういう問題を一体どうするか。

事前協議の大切さ

私は、このような事態への対策のいちばんの基本は、事前協議だと思います。なぜならば、災害は基本的には行政が対応するわけですが、災害が大きくなればなるほど行政枠を超えてきます。しかし災害に対応する行政は、あくまでも行政の枠組の中でしか対応できません。私のところの周りに小さい町がいっぱいあるわけです。担当さんに電話したら、だれも外国人担当がないのです。もう手がないです。それで、私のところすべてハブ都市として長岡で総括するから、県から一言言ってくださいと言ったら、管轄外でできませんと言われました。なんと県から私のところにお手伝いに来てくれたのは2週間たってからです。私はその時、机を持ち上げて投げつけてやろうと思いましたが、それぐらい県も実は手が足りないということです。しかも、広域災害になったときに、各市町村にどれぐらいの外国人がおられるのかのデータを把握していないと、だれも手が出せないのです。

私たちが「いる」ことの発信

私たちは最初に「避難所にどれぐらい入っているか」という数の確保を行うと同時に、「避難所にどう入れるか」ということも考えました。避難所にさえ入れば我々も手が届く、安否確認もできるということで、一生懸命やったのですが、いちばん役に立ったのは、実は横浜市が作られた表示でした。

そしてそのときに、1枚の紙をあわせて持っ

ていきました。長岡で何がいつ、どんなことが起きたか、これからどんなことが起きます、どうしたらいいかということ盛り込んだ紙でした。これらの表示は「あなたたちは一人ではない」というメッセージも意味しています。彼らがいちばん怖いと思うのは、自分が見捨てられたのではないか、捨てられたのではないかということです。そう思わせないことが実はいちばん最初のボランティア活動の核になると思います。これらの表示は、「我々がいる」ということをどういうふうに発信してあげるかを考えた結果でもありました。

巡回レポート

もう一つ難しいのは、避難所に我々が行くのですが、ボランティアなんて向こうから見ると怪しい人です。私もどちらかという怪しい系で、あまりビジュアル系ではありません。国境を越えるときにはVIPに近いほど時間をかけていただきます(笑)。いろいろな市町村が、黄色いベストはどうだか言いますが、そんなものはへのつっぱりにもなりません。そんなものには行き着かないですから。いちばん大事なのはガムテープです。うちは全部黄色いガムテープを張りました。上着でもTシャツでもいいわけです。自分の得意な言語を張って、どこから来たかをマジックでかってに書いてもらえば、だれでも入れるわけです。ぱっと遠くから避難所を見て、「あっ、あそこが来ている」と分かるだけでいいのです。

もう一つは、ボランティアが成り立つというのは、信頼の相互関係です。ここに巡回レポートの書き方を入れておきました(図2)。これは大事なことだと思うのですが、ボランティアの人が行って問題を相談された。翌日また違うボランティアが行って、2度これを繰り返したら3回めはないということです。我々はこれを

巡回レポートの書き方（サンプル）

巡回した日時、担当者名、避難している外国籍の数とその国別を記入する。

避難所名を記入。

○ ○ 高校体育館

◆日付：10月25日（月）
 ◆時間：18:30～19:00
 ◆来場者：○○、△△、□□
 ◆在住外国人＝15名

◆会場見取り図と外国人居住者の位置

◆人の動き
 10人（留学生）、5人（社会人）

◆巡回メモ

◆留意事項

◆申し送り

◆その他、気がついた点などを書きとめておく。

◆会話を通して、気づいたこと、不安に思っていることなど、何でも書き取る。また、次に巡回するまでにすべき事を書き記しておく。次回巡回する担当者に引継ぎをし易いようにしておく。

◆避難所内のどこに外国籍の方が居るのかを把握する。

図2 巡回レポートの書き方

心の巡回レポートと呼んだのですが、ここにだれが、いつ、どこに行って、どの国籍の人たちがどれくらいいるか、なるべく情報を入れるのです。

いちばん大事なのは、避難所に何千人も入りますから、その人たちがどこにおられるかというのを置いておくことです。そうすれば彼らが消えたことも分かるのです。これがないと誰がいて誰が消えたのか全然分かりません。例えば、アジア系の方など、我々日ごろ接している人間だったら消えたことは、普通の人には分かりません。

それから、彼らから受けたことに対して、必ず申し送りをどういうふうにしたかということを中心に盛っておくわけです。このファイルを各避難所の一つずつ作りました。それから、各言語で翻訳してもらったメッセージをこの中へ

全部何十枚と入れて持っていきます。ですから、1冊持っていれば、すべてができるわけです。

個人カルテ

これではほとんど一般論で対応ができないのですが、例えば高齢者や女性やいろいろなお医者さんに、特定の医者いつかかるか、薬は何か、既往症がどうだという、こういう問題が出たときは個人カルテをもう1枚作っています（図3）。これは全く外には出さないということを中心に言って、個人カルテを書くのです。これには言語能力も書いておきます。そうすると、どういうボランティアがついていったらいいかははっきりするわけです。

これにきちんと対応することが、いちばん根拠となるボランティア活動の信頼関係の確立になります。これがもしないとしたら、ほ

個人カルテの書き方（サンプル）

長岡市国際文化課
外国人居住者支援ネットワーク

個人カルテ

基本情報を記入。

◆仕事先：株式会社〇〇〇

◆家族：4人（妻・子ども2人）

◆居住地：△△町1-2-3

◆コミュニケーション言語、レベル
ポルトガル語 よくできる / 少しできる / できない
日本語 よくできる / 少しできる / できない

◆連絡先 ▼▼公民館 電話 123-4567

◆その他属性情報

◆巡回メモ

日時	記入者	メモ	申し送り
10/28	●●	余震が恐くて、子どもが寝付けない。 周りの人が親切にしてくれて、うれしかった。	特に問題はないが、 気にかけてあげて！ ポルトガル語新聞必要
11/1	■	いつまた、大きな地震が来るか不安。	

グループで避難している場合は、グループ名(任意)を記入。
避難所を移動している場合は、履歴を記入する。

気がついた点、困っていることなどを記入する。個人情報なので、取扱いに十分注意する。

次回に引継ぎがある場合は、次の担当者がわかるように！

図3 個人カルテの書き方

とんどボランティアは役に立ちません。「あの人は聞いていって、あの人はどうして今日は来ないのだ」となります。入れ替わりをしてもこういうふうにはシステムがきちんとしていけば、ずっと申し送りはできます。ですから、皆さんのところでもし何かあったら、これを参考に作り替えをしていただければと思います。これはあくまでも長岡でとりあえず作ったひな形ではないのです。

ただ、非常に難しかったのは、いろいろな人が入ってくださるので、全体を統括する人間、行政もボランティアセンターもすべてを含めてできる指揮者、つまりスーパーバイザーがいなければいけないということです。これは状況の把握からすべてにおいてです。この人が一元化する。その下に、各活動を統括できるコーディネーターがいるということが大切になってきま

す。この2段階があると非常に強いです。どうしてかという、スーパーバイザーが全体を見ながら、外側の活動と拠点の活動とにおいて情報を入手する。そしてそれらの情報をまとめて外側と各活動のコーディネーターに出していく。こういうこときちんとやらないと、なかなか的確な活動ができないということなのです。私がみなさんにいちばん覚えていただきたいのはこれです。

あともう1つ付け加えるとすると、地元の人間の確保です。地元の間人は地理が分かります。ですから、地元の人間の確保ということは、そういう生きた地理条件を把握できる。それから、その地域の人々の感情も分かるということで、必ず外から来られたボランティアとペアにすることも重要です。そうすると、力が10倍にも20倍にもなります。ですから、単なるツール

の問題ではないというのはそこで、それをどう活用するかということは田村さんも岡本先生もおっしゃったけれども、つまり人間が非常に大きな課題なのです。

多文化共生

21世紀はまさに災害がキーワードだと思います。そして災害時に発生する大きな問題が孤立だと思います。ですから、日常の中で人を生かして自分も生きるという概念が、多文化共生だと思うのですが、これは社会とも呼ぶと思うのです。自分一人でいいというのは孤立で終わると思います。ですから、まちづくりの中にそういう概念をきちんと定着させる。それから、国境というしょうがないものを言うのではなく、命の重さは国境に関係ないということを我々がどういうふうに日常から感じられるようになるかがポイントだと思います。

それにはやはりいいおつきあいをすることで。集住地区を作るよりも、むしろ混在するまちづくりで、何かあったらぱっと手を貸してあげる。多文化共生の枠の中には障害のかた、高齢者、子ども、全部入ると思うのです。ですか

ら、易しい日本語というのはそういうときにも役に立ちます。ですから、別に外国のかたばかりが問題なのではありません。

私は地震のあとで非常にショックを受けたのは、私の近所に実は市議員で目の不自由な方がおられます。行ってびっくりしたのは、彼はどこへも逃げていなかったのです。逃げられなかったのです。盲導犬が机の下へ隠れてしまって出てこないのです。ああいうのを私は初めて実際に見てびっくりしました。

私が田村さんと、今、いちばん心がけているのは、このような経験の手渡しです。日本ではこういう災害は幾度もありましたが、手渡ししなかったのです。私は田村さんから、つまり神戸からバトンタッチされたと思っています。神戸は都市型で、長岡は山間地型です。このバトンをもって日本に情報発信をして、皆さんと共有していきたいのです。

我々が単発でやったことが歴史の中に埋もれていくのではなくて、今度は岡本先生たちに上手に積み上げをしてもらって、それがまた共有されていくということが、日本の防災文化になるいちばん大事なところだと思います。

－在住外国人を災害弱者にしないために－

第1 長岡ってどんなまち？

- ・2005年4月1日に、長岡市、中ノ島町、三島町、越路町、小国町、山古志村が合併
- ・2006年1月1日新たに、栃尾市、寺泊町、与板町、和島村が合併予定

1 人口と在住外国人数

- ・2004年10月1日（地震発生前）

人口 192,283人

在住外国人 2,118人

（住民登録人数に対し 1.1%）

- ・2005年4月1日（合併後）

人口 234,822人

在住外国人 2,257人

- ・2006年1月1日

人口 約29万人

2 7.13水害の発生

- ・三条市、見附市、旧中ノ島町（長岡市と合併）、長岡市で大きな被害発生

第2 2004年10月23日 午後5時56分、中越地震発生

- ・地元ボランティア、職員も被災者に

第3 在住外国人支援の経過

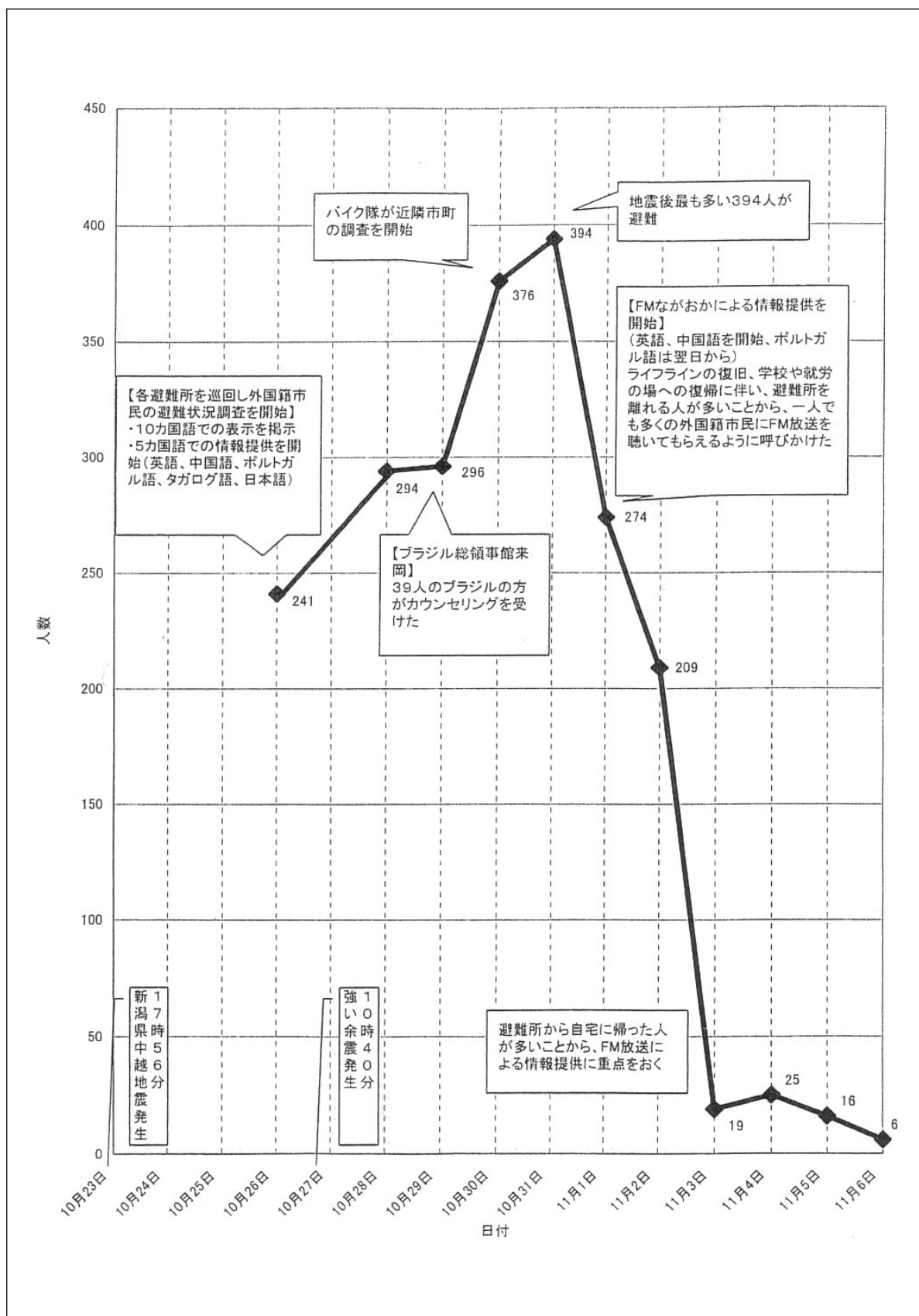
1 使用不能となった国際交流センター

- ・続く余震（避難所に入れない外国人）

2 避難所訪問による実態把握

- ・緊急時の三角ネット
- ・神戸の財産を共有
- ・言語系ボランティアセンター
- ・巡回レポートと個人カルテ

資料2：外国籍市民避難者数の推移



パネルディスカッション

「地震を迎え撃つ東海地域で、私たちが今すべきこと」

司 会

佐藤 久美 (英文情報誌「アベニューズ」編集長)

出席者

木村 玲欧 (名古屋大学災害対策室)

田中 京子 (名古屋大学留学生センター)

田村 太郎 (NPO 法人多文化共生センター)

羽賀 友信 (長岡市国際交流センター)

三池・アリセ・ミホ

(財団法人浜松国際交流協会)



佐藤久美氏

(佐藤) 前半では、田村さんには、1995年の阪神・淡路大震災でどのようにご活躍されたかという話をいただき、羽賀さんには、それから約

10年後の中越地震で外国人の情報提供などでどのようなご苦勞があったかなどのお話を聞かせていただきました。

今からパネルディスカッションに入りますが、浜松市からは浜松国際交流協会の三池・アリセ・ミホさんにおいでいただいております。それから、ここ名古屋大学の留学生センターから田中京子さんにおいでいただいております。そして、名古屋大学災害対策室の木村さんです。お話をいただきました田村さんと羽賀さんにも、いろいろアドバイスを頂くといい形でディスカッションに加わっていただきます。

1時間半の時間がありますが、前半の45分間をパネルディスカッション、後半の45分間

は、会場からのご質問を受け付ける時間といたします。皆さん、何を聞こうかなと考えながらディスカッションをお聞きいただければと思います。

それでは木村さんに、ここ名古屋にどんな災害がやってくるかということ、専門家のお立場からお話ししていただきます。よろしく願います。

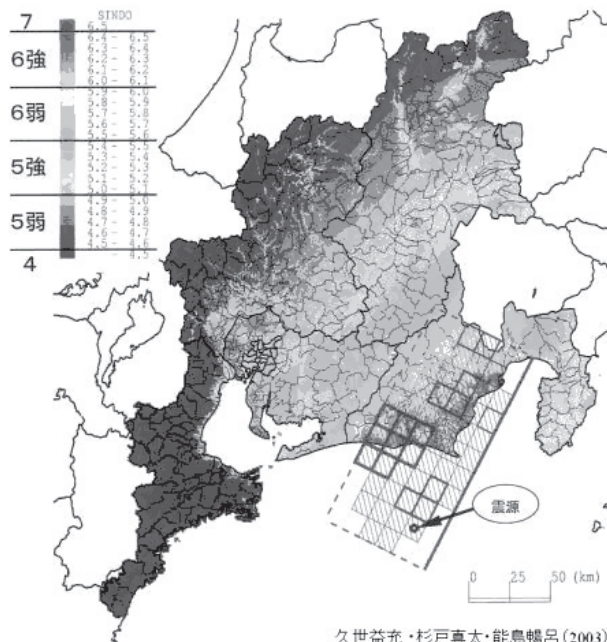


木村玲欧氏

(木村) この東海地域ではどんな地震がやってくるといわれているのかということについて、簡単に紹介したいと思います。

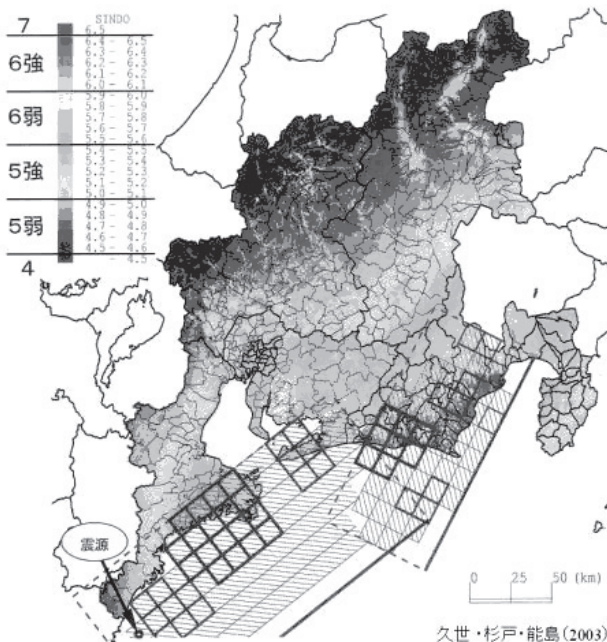
11年前の1995年1月17日午前5時46分に、兵庫県南部地震、つまり阪神・淡路大震災が起きました。西日本は地震の活動期に入ったという研究者もたくさんいます。実際にこの東海地域で暮らす人たちにはどんな地震が予想される

想定東海地震



久世益充・杉戸真太・能島暢呂(2003)

想定複合型地震



久世・杉戸・能島(2003)

図表 1

のかというときに出てくる数字が、「2035 ± 15年」です。±ですから、足すと2050年、引くと2020年になります。国の調査ですと、2020～2050年の30年ぐらいの間に海溝型地震といわれている東海地震、東南海地震、南海地震が発生する確率が最も高くなるということです。そして、地震の歴史的観点から見て、この前後もしくはこの間に阪神・淡路大震災や新潟県中

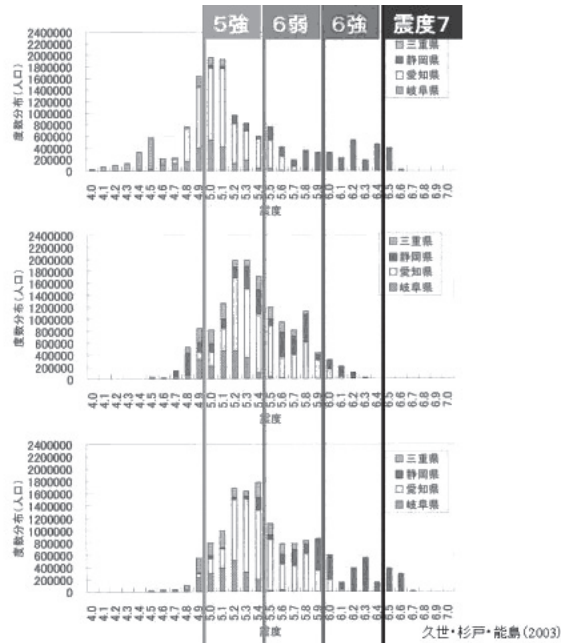
越地震のような、地面の真下で起こる直下型地震が頻発するといわれています。

実際にどれぐらいの揺れに襲われるかという、もし東海地震が起きますと、愛知県では震度5強～6強の揺れに見舞われます(図表1上)。東南海地震では、愛知県は震度6弱の地域が多くなります。歴史的に見ますと、これが両方同時に起きるといことも何回もありま

想定東海地震

想定東南海地震

想定複合型地震

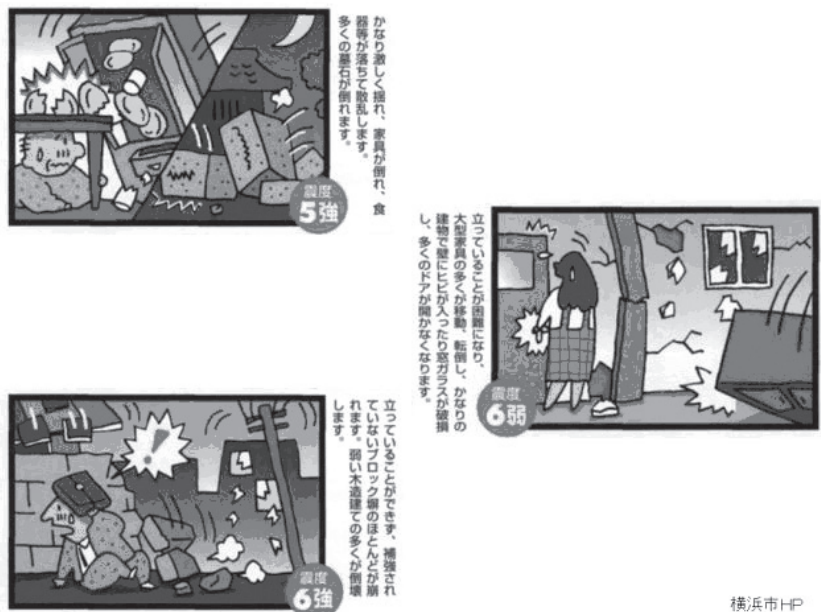


図表2

す。同時に起きると、揺れがさらに1段階強くなる感じで、震度6強～7の揺れに襲われる可能性もあります（図表1下）。このような予想が出ているわけです。愛知県、三重県、岐阜県、静岡県のたくさんの都市が震度5強～7で揺れます（図表2）。

震度5強～6強の揺れとはどれぐらいのものかというのがこの絵です（図表3）。震度5強

では、かなり激しく揺れ、家具が倒れ、食器等が落ちて散乱します。多くの墓石が倒れます。震度6弱になると、立っていることが困難になり、大型家具の多くが移動・転倒し、かなりの建物で壁にひびが入ったり窓ガラスが破損し多くのドアが開かなくなります。震度6強になると、立っていることができず、補強されていないブロック塀のほとんどが崩れます。弱い木造



図表3

横浜市HP

建物の多くが倒壊するかもしれません。いちばん上の震度7になると、建物倒壊が起り、山崩れ、大きな地割れが生じ、堤防や橋げたなど、広範囲にわたって被害が予想されます。

東海地域ですと、震度6弱ぐらいから、ひどいところだと震度6強ぐらいの揺れで、地盤の悪いところでは震度7の揺れに襲われる可能性があります。その時期が刻一刻と近づいており、直下型の地震も起きる可能性があるというのが、現在の東海地域の状態です。

(佐藤) ありがとうございます。刻一刻と迫っているというお話でした。それでは田中さん、留学生への対応についてお話しただけででしょうか。



田中京子氏

(田中) 名古屋大学はどのような留学生への情報発信をしているかを報告します。私自身も実は20年前ですが、1985年、メキシコで大地震

があったときに、たまたまメキシコシティーで仕事をしておりまして、大地震に遭いました。そういう経験もありまして、災害というのは本当に自分の身に振りかかることなのだと感じます。しかも、留学しているときや海外で仕事をしているようなときにも来るのだということを実感します。家庭でも職場でもできるだけ災害対策をしたいと思っているのですが、実際のところは、家でも何か家具を買うときに地震のことを考えると、子どもたちは「また始まった。どうせお母さんは、また地震だの何だの言うのでしょ」というような反応があるぐらいで、感じない人は感じないのだなと思っています。

名古屋大学の留学生の特徴としては、まず年齢層が比較的高いことがあります。高いといっても30代ぐらいですが、そういうことから家族と一緒に住んでいる学生がけっこういます。言葉については、勉強するため、研究するための言葉として英語を解す学生が多く、生活に必要な言語として日本語を解す学生が多いことです。地震の経験については本当にさまざまで、ワークショップなどをやっても、自分は自分の国で訓練を受けてきているのであまり必要ありませんという学生もいますし、地震についてどういふものかというイメージさえもわからないという学生もいます。いろいろな学生がいます。

情報発信については、これまで何回か転機がありました。その第1回めが阪神・淡路大震災でした。それまでは入学してすぐの全員が参加するオリエンテーションでパンフレットを配って、「地震に自信を」という多言語で書かれたパンフレットを配って注意を呼びかけるぐらいでした。阪神・淡路大震災からは毎期、1年に2回ですけれども、ワークショップを開いて、災害対策室、また千種消防署などのご協力もいただきながら、講義や実習、起震車の体験、ビデオを使ったクイズなどで、地震についての意識を高めるようにしてきました。それが95年です。

そのころは入学者のほとんどが参加して、50人、100人という数の学生が毎回参加していたのですけれども、だんだん人数が減りまして、7～8年後にはたしか7～8人まで減ったこともありました。地震のワークショップをやっても、あまり人が来ないからどうしようというように、今度はスマトラで津波が起り、新潟で地震が起り、またこの数年は非常に意識が高まっているというところですよ。

この数年、世界でいろいろな災害がありましたので、私たちも本当に留学生を守っていける

のだろうかということで、具体的に想像力を働かせて、いろいろな対策をとるようになりました。例えば、留学生センターの場合には、ワークショップを行うだけでなく、スタッフそれぞれがヘルメットと懐中電灯を研究室にも常備していますし、階段に懐中電灯をつけ、そして外にある倉庫に、少しずつ予算のあるときに買っている毛布、ヘルメット、懐中電灯ほかいろいろな対策グッズを入れています。

この倉庫の鍵についても、先ほどの講演の中でもありましたが、平時のときのシステムが働かなくなるのが災害ですので、倉庫の鍵はいつも事務室にあるのですが、その事務室に届かないこともあるということを予測して、だれでも取れる外のある場所に鍵を置いています。その場所については、大事なものほど忘れますので、毎月の教員会のときに必ず一言、鍵はどこですと言うようにしています。

災害時の伝言ダイヤル 171 も、練習をしないと使えないだろうということで、毎月1日に練習ができるようにシステムがなっているので、スタッフでまず練習を始めました。録音する側になってみたのですが、けっこう難しいのです。いろいろなメッセージが流れる中で操作するのは、緊張があつてなかなかできないということが分かりました。同じようなメッセージを何回も録音してしまったりします。英語で吹き込むメッセージも、本当だったら聞いてほしくないような下手な英語でも、とにかく吹き込んで、みんなに聞けと言わないといけないわけです。ですから、いつもの恥とか外聞がなくなるといけないと、今から練習しています。

そういうわけで、ずっと続けてきたのですが、留学生のようすを見ても、日本が地震のある国だということが分かっている人は多いのですが、この地域がということはあまり意識せずに来た人が多いようです。です

から、東海地震というものが近く起こると思われていますということを最初のオリエンテーションで言うと、どよめく感じでびっくりする声が聞こえます。

子どもがいたり家族がいたりという意味でも、非常に予防への意識は高いと思います。特に、アパートが安全か、寮が安全かという、建物の造りについての意識が最も高いように思われます。それだけ意識が高い人たちが、日ごろの準備はどうかなと見てみますと、例えばちょっと部屋を見たときに、ベッドのすぐ近くにテレビが置いてあって、すぐに落ちてきそうだったり、ガラスのすぐ近くにベッドを置いていたりということで、建物に対するほどの安全対策はとられていないということが見てとれます。そこがこれから強調していかないといけない点ではないかと思っています。

留学生が求める情報は、分かりやすい言葉と表現による各住居、研究室、状況に即した情報です。それぞれみんな違うところに住んでいて、研究室によって全く状況が違います。実験系で薬品などを使う研究室もありますので、それぞれの場所での情報を知っていて伝える人が必要だと思いました。

情報の整理力、説明力、現場の判断・責任、それを奨励する姿勢・雰囲気求められます。情報を発信するということは、自分が情報をきちんと整理して持っていることが必要です。それを伝えるときに、結局、自分が責任を持って伝えられるという気持ちは言葉と態度によって伝わりますので、自分には本当は責任はないのだけれどもといった責任回避の態度があれば、それは情報としてなかなか伝わらないということをよく感じます。

それを奨励する雰囲気や日常の仕事の中でのシステムですが、上司が何かを言わないと動けないとか、または自分が上司なら自分の部下に

は何も判断させないとか、何かミスがあったら怒るとか、そういうことではなくて、それぞれの部署、それぞれの人が、緊急のときには判断して、動いて、それをあとでもちろん褒めたり注意したり、いずれにしても各自が判断できる能力をつけ、奨励するという姿勢や雰囲気があるから職場でも求められていると思います。

正直なところ不安はたくさんあります。これからぜひ今までご経験なさったかたたちに聞きたいと思います。一度も大災害には遭ったことがないということで、想像はいろいろするのですけれども、足りません。実際に大地震があったら一体何が起るのだろうか、それだけの準備ができていないことがたくさんあると思います。特に留学生について言えば、留学生センターという名前がついているということで、留学生自身もよく情報源として使ってくれていますし、時にはオアシスだと言ってくれる学生もいます。そういう場所になっているのは非常によいのですが、留学生にとっても、周りの人たちにとっても、留学生だから留学生センターに一任すればいい、という見方をもしされてしまったなら、それに対応し切れる状況ではありません。各学部や各町内会など、それぞれの学生たちが所属しているところに、学生たち自身も住民の一人としての意識を持ってもらう。そして、ほかの周りの人たちも学生も、留学生だから大学、留学生だから留学生センターではなくて、留学生も住民の一人として日ごろから一緒に行動していく体制が求められていると思います。

(佐藤) ありがとうございます。留学生が1200人も名古屋大学にいて、出身国が70か国以上ということで、そういった人たちに、この地域はこういうところなのだよ、地震が起きたときにはこういうふうにするのだよということを伝えることは大変難しいことだと思います。

そのあたりはあとで田村さんと羽賀さんにお聞きできると思います。

それでは浜松国際交流協会の三池さんにお話を伺いたいと思います。浜松は日本でいちばんブラジル人がたくさん住んでいるところなので、今日はブラジルからおいでの方の三池さんにお話を聞きたいと思います。



三池・アリセ・ミホ氏

(三池) 財団法人
浜松国際交流協会 (HICE)、ブラジル人相談員の三池・アリセ・ミホです。私は在住ブラジル人市民を対象に生活相談をポ

ルトガル語で行ったり、日本人市民にはブラジル文化を紹介したり、浜松での外国人の暮らしなどを伝えたりしています。

現在、浜松には2月現在ブラジル人が1万8463人います。浜松には79か国の外国人がいます。外国人は日本人人口に対して3.76%です。

私はブラジル、サンパウロ州の出身で、15年前に来日しました。日本は地震の多い国だと聞いていましたが、当時は外国人市民も少なく地震についてあまり勉強もしていませんでした。しかし、阪神・淡路大震災のようすをテレビで見て、地震の恐ろしさを知りました。ブラジルには地震がほとんどなくて、どのようなものなのか体験したこともないので、本当に怖いと思いました。

以前、私はブラジル人コミュニティのグループのリーダーをしていたことがあるのですが、そのとき防災のパンフレットやビデオの作成などにかかわるようになり、防災について勉強をしました。パンフレットは近所に住んでいるブラジル人やペルー人に2000年に配布しました。

災害について知ってもらうようにしましたが、外国人は実際に地震などの災害が起きないと関心を持ってくれません。

2002年の9月1日には私のグループ、ブラジル人の中で防災に興味を持つ50人が、地域の日本人自治会関係者など1000人と一緒に、地震に備えての防災訓練を行いました。この訓練ではバケツリレーをしたり、煙のいっばいになった家から煙を吸わずにどのように逃げるのかなどを、実際の訓練や消火器の使い方を体験したり、起震車に乗ったり、保存の飲料水や保存食を味わってみたりしました。この訓練に参加したブラジル人は、「もうこのような体験をしたので、本当の地震が起こっても慌てないでいられる、知らない人にも避難所でみんなにこの体験を教えてあげることができる。」と言っていました。

その後、このような訓練をもとに、ポルトガル語版の地震対策ビデオを作りました。このビデオでは、阪神・淡路大震災の被害の状況なども取り入れて、実際の地震の怖さを伝えていきます。このビデオは中越地震が起こったときや、浜松で起こる普通の地震のあと、たくさんのブラジル人がHICEに来て借りていきました。私たちのような外国人コミュニティ・リーダーがそれぞれしっかり災害の情報を伝えなければ関心を持ってくれないと思います。

浜松では2000年度より外国人市民会議が行われています。子どもの教育についてや行政のいろいろなお知らせを外国語でしてほしいなどの提言を行ってきました。また、2004・2005年度の外国人市民会議では、「地域共生～安心・安全のための都市づくり」をテーマに、行政に対して提言書を出しました。そこで私たち外国人は、日本語が不自由な外国人のため、自治会で行う地震の防災訓練のお知らせを多言語で作成してほしいことや、外国人市民のための防災

訓練などを行うことや、災害時の情報を広く伝えてほしいことなどをお願いしています。私もそのとおりだと思います。

日本の学校に通っている子どもたちは、学校で防災訓練を行っていて、親はその子どもからいろいろな情報を知ることができます。防災や災害に関する情報を外国人にも広く伝えることは、市役所や国際交流協会だけで行っていくのは無理です。自治会でせっかく防災訓練があるのに、回覧板でお知らせするだけだと、日本語が読めない外国人はその内容を理解することができません。自治会も外国人コミュニティと連携をとっていくことが大切だと思います。もっと外国人市民も積極的に防災訓練に取り込めるような環境づくりをしてほしいと思います。近所のかたから気軽に声を掛けてくれないと、なかなかそういう活動に参加することはできません。

まずは日本語ができる外国人コミュニティ・リーダーの育成をして、そういうリーダーに防災や災害の情報を周知させ、防災に関心を持ってもらうことが必要だと思います。

(佐藤) 静岡県は二十数年前から東海地震が起きるといわれているのですが、やはり外国人への視点はちょっと欠けていたのではないかと思います。先ほど三池さんがおっしゃっていました。そういわれながらも、ほとんど地震が起きていないことで、ちょっと皆さん、油断してしまったというところもあるのでしょうか。

(三池) 幸いに地震が来ていません。でも、起きたときは、私はどういう行動をとったらよいか分かりません。

(佐藤) 今日は田村さんと羽賀さんが来てくださっているので、いろいろお話を聞いてみたい



パネルディスカッションの様子

と思います。先ほどから田村さんも羽賀さんも、コーディネーターが必要で、そしてその活動をスーパーバイズする人、つまりスーパーバイザーも必要だとおっしゃっていました。そのようなスーパーバイザーやコーディネーターをどうやって育成していくことができるでしょうか。



田村太郎氏

（田村） 長岡の場合は羽賀さんがいらっしゃるというのが、奇跡的なことです。ほかの地域で「うちには羽賀さんみたいな人はいないので、どうしたらいいでしょう」とよく言われますが、これほどの方を育成するのは無理かなという気がしています。でも、キーパーソンはどこでも探せばいらっしゃると思います。三池さんの地元の浜松にもいると思います。しかし、その人がひょっとして昨日までの羽賀さんのように砂

漠に行ってしまうときに地震が来るかもしれない（笑）。その場合には、居合わせた者の中でベストな選択をすることしかないという気はします。

（佐藤） なるほど。この会場にいらっしゃるかたは、すべてがキーパーソンになりえる人たちだということでしょうか。

（田村） けがをしなければ（笑）。

（佐藤） そうですね。羽賀さん、いかがでしょう。



羽賀友信氏

（羽賀） 事前にどうしておくかということをお話したのですが、そこは共有できると思うのです。それをいかに全国的に共有して

において、では自分はどうしたらよいかと前向きに主体性を持ってかかわる人は、すべてスーパーバイザーになる可能性があると思います。

ただし、そこに生きた情報をどれだけ手渡ししておくかです。これから全国のネット化の中で、CLAIR（自治体国際化協会）が作った資料が6月に配布されるということですが、それをどう活用するかというフォーラムをしていかないと、また机のうえでほこりをかぶって終わるのかなという危機感があります。

スーパーバイザーのいちばん大事な仕事は、災害時の目線だと思うのです。自助・共助・公助という中で、どれだけ自助を拡幅しておくかということが、スーパーバイザーがコーディネーターと一緒に動ける要素だと思います。三池さんが先ほどおっしゃった中で、自分が自分をどう守るかということ自分を意識できるということが大きなテーマだと思います。スーパーバイザーというのは、そういうかかわりの中で日ごろの業務を考えていける人ととらえたほうがいいのかもかもしれませんね。

緊急時は、私がいれば私が行きますし、田村さんなんて、呼ばなくても来ますから、ぜひ呼んでください。

(佐藤) この場所も分かっていたことですし、木村さん、名古屋大学の災害対策室の役割はどのように考えられるでしょうか。

(木村) 大学の災害対策室とはどんなところなのかとよく聞かれるのですが、学内の防災対策をすることがまず一つです。もう一つは、こういう地震が起きたらこうしましょうねという学外への普及活動です。その二つが大きな柱になっています。学内の防災対策は、例えば毎年の防災訓練は来年度で4回めになりますが、防災訓練という日を設けて、すべての教員・職員

が伝達がちゃんとできるような連絡網を作り始めて3年ぐらいたってやっと情報を伝達するようになって、初めて大学ってつながっているのだとみんな思ったということもあります。このように大学の中では防災対策をしていますが、地域の中で大学や災害対策室という組織がどう動くのかというのはまだまだ課題が多くて、そこまでできていないというのが正直なところです。

(佐藤) 今日はたくさんの方の名古屋市民も来てくださっているのですが、名古屋大学災害対策室は何かやってくれるのではないかと期待していると思います。ぜひよろしく願いいたします。

(木村) ありがとうございます。先ほどの羽賀さんの話なのですが、羽賀さんと自治会の関係を聞きたいのです。三池さんのおっしゃった自治会と外国人コミュニティとの関係で、もし羽賀さんが自治会長だったり自治会の役員だったりするならば、自治会をどうやって引きつけていったのか。もし羽賀さんが自治会にあまり関係がなければ、どうやって自治会を巻き込んでいったのか、それとも見放したのか、その辺を聞いておきたいのですが。

(羽賀) 私は自治会とはほとんど接点がないのです。日常の中で、出前講座というのをたくさんして、高齢者がいるところに外国の人に行ってもらおうようにして、言葉が通じなくても心は通じるなということを感じていただく。これが防災だと私は思うのです。もう一方で国際交流活動が、いざというときには役に立つと思っています。それをやっておくことは大事ですが、実際の地震のときには、我々はそこまで手が回らなかったのです。ですから、日常、本当に先ほど三池さんのおっしゃったように、回覧板の

中に防災関連の情報が入っているというような自治組織を、外国籍のかたたちが立ち上げるのがいちばん大事だと思います。

もう一つは、さっきお話ししなかったのですが、マニュアルはどこにでもあると思うのです。ただ、そのいちばんの欠点は、生活マニュアルの一部に防災マニュアルが入っていることです。そうすると、厚いものを読まないですね。地震を知らない人が読むわけもない。私だって読みたくありません。

今、長岡市は、外国人が初めて市に来て登録するときのために、短いDVDを作ろうとしています。「防災・災害時にはこういうことがありますよ、ですから、ぜひあなたのメールアドレスを登録してください、災害時には我々のほうから連絡を入れます」というような内容のもので。もう一つは、パスポートに挟めるサイズのリーフレットを作っています。これは緊急時の内容だけです。A4を折って本のようにしてパスポートに輪ゴムでとめてしまうのです。裏にはびっしりと細かく多言語で書いてありますが、表は絵を使っています。今、留学生と一緒に作っています。パスポートを持って逃げた瞬間に、「あっ、そういえば」と思ってこれを見て、こうすればいいのかということがわかるように、単純化をしています。

(佐藤) 各地域で外国人登録をするので、その登録時に情報を渡してしまうということですね。

(羽賀) そうです。木村さんがおっしゃった大学の役割は、一つは、全国がどういうものを持っているのかというアーカイブとして、いいものを取り上げて、それをもう一度直してもらうように投げていく。そういう情報交換のための掲示板を作ったり、名古屋大学の防災というテ-

マで、防災に使えるこういうマテリアルがあり、これを活用するにはどうしたらよいかというようなことが、一元化して提供されるようなシステムがあれば、それは大学らしい非常によいシステムになると思います。

(佐藤) 情報を共有するということですね。それから、それぞれの地域での教訓を生かしていくことが大事ですね。

(羽賀) 情報を共有し、それをコンセプト化するということですね。

(佐藤) さて、名古屋大学には約70か国の留学生がいて、地震国から来た人もあれば、地震を全く経験したこともない、想像したことすらないような国から来ている人たちもいます。そういう人たちを啓発したり教育したりするのは大変だと思いますが、田中さんはどんなことに気をつけていらっしゃいますか。

(田中) 地震国から来て、自分はいろいろ知っているからもう日本の説明を聞かなくてもいいという人については、ワークショップ等は強制するものではありません。最初のオリエンテーションで資料を配り、それ以上のことは希望者に伝えていくようにします。

もう一つは、やはり分かりやすく伝えるということですね。日本語で伝える場合には、分かりやすい日本語でということですね。これは弘前大学でも冊子になっていますが^{*注}、とても大切です。英語にしても、ふだん大学の中で英語で何かを発信するということとすぐにネイティブチェックというのですが、それは全然必要ないのです。そうではなくて、みんなが分かる英語を作り上げていかないといけない。私自身もいつも自信を持ってマイ・イングリッシュを使います。今

まで作り上げていったいろいろなプライドとか恥とか、特に日本社会にありがちな上下関係やメンツなどをふだんから取り払っていく、その辺がいちばん変えていきたい点です。

*注：弘前大学人文学部社会言語学教室・減災のための「やさしい日本語」研究会
編：災害が起こったときに外国人を助けるためのマニュアル

(佐藤) なるほど、私たちが外国語を使うときに間違えてはいけないと思って、つい言わなくてはいけないことも引っ込めてしまうことがあります。緊急時にはそんな恥も外聞も脱ぎ捨てて、とにかく伝える、どうやって伝えるかが大事だということでしょうか。自分は地震についてよく知っているから、そんな教育は要らないと言っているのはどんな国の人たちでしょうか。

(田中) アメリカ西海岸の人たちとかラテンアメリカで、つい最近聞いたのはチリの人でした。また、エルサルバドルの人もいました。でも、逆に自分たちが受けた教育と比較したいので興味があるという人もいます。

(佐藤) 震度についても違いますね。日本で震度5というのと、アメリカの震度とは違います。その辺もぜひみんなと共有していきたいですね。日本の震度はこういうものだよということを説明するところから始めるということでしょうか。

さて、三池さんは日本語もとてもお上手でいらっしゃるし、ブラジル人のコミュニティのために一生懸命やっていたらっしゃるわけですが、例えばブラジルの人たちの中には一生懸命仕事をするのが大切で、そのようなコミュニティに加わりたくないとか、日本語を勉強したくな

いという人たちも多いと思いますが、そういった人たちにも情報提供をしていくことが大事ですね。そのような人たちをどうやって取り込んでいらっしゃるのでしょうか。

(三池) いちばん情報提供をしなければならないのはまさにそういった人たちです。関心を持つ人たちは自分たちで国際交流センターや市役所やいろいろなところで情報を得ていきます。そういう関心がない人たち、仕事をしている人たちは、雇っている工場や派遣会社に声を掛けたりして、もっと情報を提供するようにしてもらいます。ブラジル人は避難所さえ知りません。そういうことも外国人登録に行ったときに、あなたはこの地域に住んでいるから避難所はこれとこれがありますよとか、もうちょっと積極的に教えるなど、いろいろなことをしなければいけないと思います。

(佐藤) そうですね。情報を求めてくる人だけではなく、求めていない人にも、こちらから一歩踏み出した情報提供の在り方を考えなくてはいけないということですね。

浜松市には多言語生活情報「カナル・ハママツ (Canal Hamamatsu)」というホームページがありますね。私も拝見させていただいて、とてもよくできていると思いました。「カナル・ハママツ」というのは三池さんがネーミングされたのですか。

(三池) はい、そうです。いろいろな名前の中から。「Canal」はポルトガル語でチャンネルです。チャンネル・ハママツです。

(佐藤) 浜松のチャンネルという意味ですね。こういったホームページがあることで、ブラジルの人でも英語圏の人たちも、浜松市はこういう

情報を提供してくれているのだなということを知ることができますね。

(三池) はい。「カナル・ハママツ」とかいろいろなホームページはありますが、新聞を読まなければ分からないことをもっと簡単に教えるページがありますよ、などと宣伝しなければいけないと思います。

(佐藤) なるほどね。15年間、静岡県には大きな地震がなかったということですが、中越地震が起きて、これはもうちょっと避難訓練などをしなくてはということになったというお話をされていたのですが、ブラジルの人たちは中越地震にどれぐらい関心を持ってニュースを見ていたのでしょうか。

(三池) やはり恐ろしい、怖いということです。IPC テレビで、地震に遭ったかたたちがどういう状態になったかを知って、地震についてもっと分かっていなければいけない、心の準備をしなければいけないと、関心を持つようになりました。

(佐藤) 人ごとではないぞと思ったわけですね。IPC テレビというのは、インターナショナルプレスという、ブラジル本国から情報が来るテレビ局があるのですね。日本でも作っていて、その両方が放送されているテレビ局です。ブラジルの人たちは全部そのテレビを見るそうですね。

(三池) はい、見ます。

(佐藤) 日ごろ自分が慣れ親しんでいるメディアに、緊急時にはアプローチするわけです。どんなことが起こったのだらうと、ブラジルの

人たちが最初に見るのはNHKではなく、インターナショナルプレスのテレビ局だと思うのですが、どうでしょう。

(三池) はい、そうです。日本のテレビを見ても漢字で書かれているので、やはり言葉が分からないと。

(佐藤) そうですね。日本語で出ている情報だけでは分かりませんね。名古屋でも一昨年ちょっと大きな地震がありました。木村さん、名古屋市の港区九番団地には多くのブラジル人が住んでいますが、そのときの反応はどうだったのでしょうか。

(木村) 1年半ぐらい前になりますが、2004年9月5日に地震がありまして、名古屋でも震度4を記録しました。覚えていらっしゃるかともいると思います。名古屋市の港区に東海学区という学区がありまして、そこに九番団地とあって、ブラジル人が多く住んでいる団地があります。非常に老朽化した建物で危ないところではあるのですが、地震が起きまして、ブラジル人のかたがわあっとみんな1階に下りてきたのです。

そこでとりあえずテントを張り出しました。団地の前にブラジル人のかたが通う教会があって、その教会の庭まで全部テントを張りました。日本人もちろん住んでいるので、ここは大丈夫だから上に上がりなさいと言うのですが、怖くて絶対に戻らないと言うのです。最後は消防の人が出てきて、絶対に大丈夫だからと言うのですが、大丈夫といっても自分が怖いものだから上がってられないと言ってひともんちゃくあったのです。

そういう経験をもとに、例えば名古屋市の消防局でポルトガル語版のパンフレットを作り出

したりした、一つの契機になったものです。そうはいっても、また地震が起こると同じようなことになるので、私などアイデアがないのでどうしようかなと考えているところで、よいアイデアがあればいただきたいと思います。

(佐藤) それではアイデアをちょっとご披露いただきましょうか。

(田村) あれは大阪もけっこう揺れまして、8時台と12時と2回ありました。津波警報が出たのです。消防庁の防災課長が言うには、避難するのが正解で、避難しないと危ない。三重県でも同じような状況で外国人が多い地域で、ブラジル人だけが逃げたのです。ブラジル人だけが公共の建物に来て避難させてくれと言ったが、帰れと言われたというのです。ところが、消防庁によると逃げたほうが正解です。それは地域によって違いますが、九番団地は警報がどうだったのでしょうか。

(木村) 特にありません。

(田村) 津波は大丈夫だったのですね。むしろ、震度4ぐらいだったら、あえて帰すよりは、とりあえず一般の学校でする訓練の一環のように、ちょっとやってみたほうがよかったのではないかな。不安でしょうし、みんなで泊まったほうがよかったかもしれない。津波警報で避難しないといけなかった地域で避難率がたしか12%くらいで非常に低かったので、消防庁としてはなぜ避難しないのだろうと問題でしたが、むしろこの場合のように必要が無くても避難してきたら、いい機会だととらえて訓練にしてみましたほうがよかったかなと思います。

避難訓練で今行われているバケツリレーとか大声コンテストとか、「何々地区の皆さん入場

で一す」のような内容は本当に無駄なので早急にやめて、むしろ避難所で一泊するような訓練をしっかりとすべきです。大阪はおととしは宿泊訓練をしました。9月の震度4のすぐあとでしたので、外国人の参加者が非常に多くて、通訳も含めて100人で学校に泊まったのです。地元の日本人もたくさん避難者役として来ていたのですが、外国人のほうが多いぐらいです。一泊しますと、みんな背中が痛いということに気がつきます。床の上に毛布を敷いて寝るのですから、当然、痛いわけです。

長岡も神戸も地震があったのは寒い時期だったのですが、9月に訓練をしますと、とにかく蚊が多いのです。学校ってなぜこんなに蚊が多いのかというぐらい。このように泊まってみないと分からないことはたくさんあります。食事も、あてがわれる避難物資で食事をみんなでしてみたのですが、それは本当に役に立つ経験でした。バケツリレーの訓練も大事ですが、ほとんど役に立ちません。人工呼吸も大事かもしれないけれども、むしろ避難生活を体験してみるということで、地域の人たちの顔が見られたわけです。そのほうが大事です。

(佐藤) そうですね。日本人はちょっとした地震があっても、「ああ、またか」、「これぐらいなら」とか、津波の話聞いても、「この間も津波は大丈夫だったから」と避難しませんけれども、外国人のほうは怖さや緊急性を感じて避難するから、日本人も一緒になって一泊ぐらいすると、地域の人々の顔も見えて、緊急時にそれこそ役に立つということですね。それはいいアイデアですね。羽賀さん、いかがですか。

(羽賀) 避難所の話が出たのですけれども、避難所で私が驚いたのは実は車なのです。エコノミークラス症候群の問題です。私もいつも飛行

機で30時間も飛んでいますのでそういうおそれがあります。1年たってメディカルチェックをしても血栓が残っているそうです。ですから、そういうことも日ごろ教えていかないといけません。建物は倒壊するであろう、だから、避難所に入りたくないとおっしゃるかたが多いのです。日本の場合は安全なところに避難所を作っているから大丈夫ですよと、その辺をどういふうにマニュアル化するかも大事な要素です。

それと、避難所に入るのは刑務所に入ることのちょっと手前かなぐらいに私は考えています。非常に寝にくいです。私は3週間砂漠で寝てもあんな快適なところはないと思うのですが、避難所は一泊でも十分です。下から冷気が上がる。板の間に寝るといふことの不快さ。もっとひどいのは、食べ物の支給がほとんど菓子パンです。菓子パンだったら酒くれよと言いたくなるぐらいなのですが、胸焼けがして、そんなものが1週間も続いたら、おにぎり評論家か菓子パン評論家になったかというぐらい、本当にそればかりなのです（笑）。

ですから、避難所という概念を我々がもっと積極的に前向きに活用するという視点で、そろそろ質を考える時代に入ったと思います。防災の中に今までの量的な考え方から、質的な考え方をどう取り入れるかということが、多文化共生の一つの概念だと思います。

(佐藤) カトリーナの被害があったときに、アメリカの避難所に避難している人たちの映像を見ていたのですが、だれも床の上には寝ていないですね。みんなイスを並べてその上に寝ていました。文化の違いだなと思ったのですが、避難所も快適でないと、避難して苦しい思いがあるうえに、つらい状況だと、どんどん気も滅入ってしまいますね。

それではそろそろ会場から質問を受ける時間

となりましたが、皆さん、せっかく今日はこれだけのパネリストのかたたちがそろっていらっしゃいますので、この場で聞かなくては、今度いつ聞けるか分かりません。どなたか質問はないでしょうか。

お名前とご所属、どちらに住んでいらっしゃるか、またどなたにお聞きになりたいかも含めてお願いいたします。

(質問者1) 名東区からまいりました。名東区災害ボランティアの会という会をしていますが、まず200名という寮生が生活しているのですが、災害対策のメンテナンスはどんな形にされていますか。それから、ワークショップをされたということですが、そのワークショップで出てきたくくりが幾つかあると思うのですが、どんなものが出てきているか聞きたいと思います。

(田中) 名古屋大学には寮が三つあって、どれにも留学生が入っています。三つのうち二つは古く、一つは2~3年前に建ったものです。古い二つが災害対策室が色分けした中で、耐震性がないほうに入っています。大地震があった場合にはひびが入ったり崩れるかもしれないということです。対策としては、つい数年前ですが、初めからついている家具が幾つかありますが、それらの固定をしました。それぐらいですね。

ワークショップの項目ですが、こちらは地震というものがどういうものかというところから始めて、いろいろな場所にいた場合に何をすべきかを考えるものもあります。ビデオを見ながら、こういう場所ではこういうことが起きるであろうからこうしたほうが良いということです。地下街、電車の中、地下鉄、ビル街、古い木造の家が多いところなど、いろいろな場所で

想定してみるということです。それは答を見るのではなくて、自分で想像して、クイズに答えてから、ビデオの映像を見ることにしています。

あとは、ふだん備えておくべきものについては、リュックを災害対策室から持ってきていただきますし、私が自分で作っている袋も持ってきています。その中のものを見せて、こういうものは何のために必要かという話をします。一つ私が工夫しているのは、自分のリュックの中には自分が責任を持って担当している学生たちの名簿を入れています。そこで名簿を持っているというのを見せて、何かのときには私自身は動けないかもしれないけれども、この名簿を使って、皆さんの所在を確認するので、住所変更などはすぐに所属の学部に知らせてくださいと言っています。所在確認がいちばん大変だったということを阪神のときに聞きましたので、その辺を自覚してもらおうようにしています。

(質問者1) 学生自身が、地震が来たときに、例えば心配事とか、どういう行動をとればいいのか、その辺はどうなのでしょう。

(田中) 学生がいちばん心配するのが、自分の家がどうかということです。家族がいる学生も多いので、自分がいないときに家族がどうなっているのか、どうすればいいのか。自分の家からすぐ逃げたらいいのか、揺れが収まるのを待ったらいいのか。その辺がいちばん質問としては多いです。

(質問者2) 羽賀さんが先ほど、人間関係を友好関係にしなければいけないと言われたのですが、私は町内会の役員をしていて、問題になるのは、どうも不法ではないかなという外国の女の人が何人かで、やっているのかどうか分からない工場の2階に住んでいるのです。ごみをめちゃくちゃに出していて、何度も注意するのですが、昼間はいないわけです。夜はどうも働きに行くみたいで、車が迎えに来ます。とにかく連絡がつかないので、町内会長さんが、その借り主の社長をつかまえて、こういうふうにごみを出してもらっては困ると言うのですが、社長は女の人たちに注意しないのです。そうすると、地震が起こったときに、申し訳ないけれども友好関係はできていません。私たちは怒って



いるのですから。それも1年、2年ではなく、もうずっとです。

もう一つは、災害対策のときに、町内会長が頑張って、どこの地域に何歳の子がいたり、高齢者がいるかということの名簿にしました。何事かがあったときにはこの名簿を見て、例えば救援物資が来たときは、ここの地域は何人いるから、おにぎり何個に飲み物は幾つとやろうと決めました。しかし、個人情報保護法ができて、町内会長はその名簿は自分だけが持つと言うのです。これでは何事かがあって会長のところがつぶれてしまったら、ほかの役員はその名簿を見られません。また、ある自治会長が名簿を紛失したことがあったらしく、市役所からもそういうものを作ってはいけないと言われました。

個人情報保護法のために、せっかくの名簿も役に立たないし、名簿の更新もされていません。羽賀さんは、友好関係、それから地域ごとに把握しようと言われるのですが、町内会に入っていない日本人もいるのだから、把握できないのが現実なのですよ。

(羽賀) 非常に大事な意見をおっしゃってくださったのですが、これは何人^{なにじん}だからではなくて、こういう人は日本人にもいるのですね。ある限界を超えた人はもうしょうがない。社会の枠組みをどうにもしたくないという人は、その枠組みの外で適当にやってくださいと切り捨てるしかないと思います。意外に、困ったときにはそういう人が泣きついてくるのです。

もう一つは、町内会というのがあるのですが、これはもう日本の社会の流れとしては、私は崩れつつあると思います。ですから、隣の人がどれか分からない。これは私たち自身の社会の問題でもあります。そうすると、少なからず隣近所は、ある程度、顔が見えていないとまずいという危機感を持っておくべきで、その中で、「そ

ういえばここには高齢者がいる」とかという、いわゆる向こう三軒両隣がいい形につながるしかないのかなと思います。たとえば、ふだんは非常にしっかりしている町内会長が腰が抜けた、そして、ふだんはものも言わない人が町内会長にとって代わったり。災害時というのはそういうことなのです。ですから、ふだんのシステムはなしにして、そのときにちゃんと動ける人が臨時的町内会長になって、「ここは皆さん大丈夫ですか」「ほかは大丈夫ですか」と、お互いにそうやっていることで連帯感が生まれます。災害のときは連帯感が即興で生まれます。

私のところも全部一軒家のエリアですが、みんな駐車場へ逃げてきて、何が始まったかという、余っている酒と食べ物を持ってきてバーベキューをやっていました。もうやけくそですね。本当にさっき田村さんが言った、ああいう状況になるのです。どうせしょうがないと。けっこうそこでできたコミュニティが町内会になっていったという面もあります。

(田村) 事前の準備でできることとできないことがあります。名簿の作成はよくいわれるのですが、全く無駄です。無理です。やめたほうがいいです。個人情報保護法もあるし、どこで漏れるか分からないので、事前の名簿は私は無駄だと思っています。むしろ、避難所での人数確認をいかに確実にするかというということが大切です。それが神戸のときと長岡のときとで全く進歩がなかったのです。全部手書きですし、この人はいるかもしれないけれども、消してあるし、いないかもしれない、みたいな、そういうものをファックスで市役所に送って、手で足し算をして、各避難所に物資を回しているのです。電子投票ができる時代なのにそんな状態です。年代も性別も一切関係なく足し算をしているだけです。UNHCRの難民キャンプの支援の

ほうがよほど合理的にやっています。避難所での人数把握はもっときっちりできると思います。事前の名簿作成とか事前の準備はできるだけフレキシビリティを残して、最低限のものにしておき、避難所でしっかりやるということです。

うちの祖母は4時間生き埋めになっていましたけれども、隣の人は捨てて逃げました。60年そこに住んでいましたが、助けに行ったのは近所にいる私のいとこでした。病院に祖母を捜しに行った私の弟は、「そのぐらいの年格好の女性でしたらたくさんお亡くなりになっていますので、顔を見て親戚のかただったらお引き取りください」と言うので、私の弟は何十人もの死に顔を見て帰ってきて、血便が止まらなくなりました。そんなにたくさん人の死に顔を見たのは初めてです、今、葬儀屋をやっていますけれども(笑)。

そんなところで住民票を見て確認はできませんよ。隣近所のつきあいがあっても、逃げる人は逃げるのです。うちの祖母は憎まれ口をたたくので逃げられたのかもしれないが(笑)。無理なのです。事前のそういうコミュニケーションづくりは大事ですが、名簿を作ったり、それを仕組みにするのはまず無理だと思ったほうがよいと思います。

(佐藤) なるほど、これはやっておかなくてはいけないとなると、やれないときにどうにもできないということでしょうか。

(質問者3) 日本語学校で外国人のかたに日本語を教えている山田といいます。尾張旭市に住んでいます。日本語教育に携わっている仲間と一緒に、実は数年前から、外国の人のために簡単な日本語と絵で冊子を作りました。もし地震になったらどうしたらいいか。そのときに家に

いたらとか、ビルの中にいたら、道路にいたらというようなこと、それから、その前にどんな準備をしておいたらよいかというようなことを書いて作りました。阪神の地震のあとに作ったのですが、もう11年になりますし、今、改訂版をと思って作っているところです。新潟と阪神・神戸の実際の体験から、外国のかたに事前にこういうことを知ってもらったらよいということがあったら教えてください。それをぜひ入れたいと思います。

(羽賀) これは大変よいことです。我々は日本語教室を二つ作りました。既存のものは日本語でキャリアアップしていくためのもので、これは有料でやっています。もう一つは、ニューカマーが寂しい思いをするときに孤立をさせないということで、まずその人を受け入れ、2番めに言葉を教えるという、ボランティアの日本語教室を始めました。これは非常に有効です。私のところで、午前と午後、皆さんがすり合わせをして、先生と生徒さんが会うようにしているのですが、多いときには20人を超えます。マニュアルも皆さんが知りたいことから立ち上がっていくので、このマニュアルをいつまでに終了するというのではなくて、まさに積み上げができてきているのです。

もし皆さんのところでも日本語を教えるというのがこれからの課題にあるなら、まず支える、孤立をさせないということです。多分いざというときにはその先生を彼らは思い出すと思います。それが広域でネットワーク化されると、すごくいい別の町内会ができます。

(田村) バングラデシュは水害がしょっちゅうあるところで、水害でも水につからないシェルターがたくさん国連などによって造られているのですが、みんな避難に行かなくて、被害が多

い時期があったのです。そのときにどうしたか
というと、そこでイベントをするのです。日本
だと多分カラオケ大会をするところですが、と
にかく避難所がふだんから使われることです。
日常の取り組みの中に災害時のことを入れてい
くのです。

災害時の情報はストックとフローとあって、
今よくいわれているのはフローの情報ばかりで
す。災害が起きたあとどういう情報を流すかと
いうことです。しかし、ストックが大事です。
私たちは小学生のときから避難訓練を受けてい
ます。そういうものがずっと積み重なって、ス
トック情報ができ上がっていて、災害が起きた
らどうしたらよいかと分かるのです。それがや
はり文化の違いで全然ないので、ふだんから例
えば日本語教室をしていたとしたらそこへ行け
ばよい。長岡のときも、ブラジル人の保護者が
いる小学校にはブラジル人のかたは避難してき
たわけです。ふだんから学校に行かない人は学
校に行かないのです。でも、ふだんから学校に
行っていけば、学校が避難所だから行くわけ
です。ふだんの取り組みの中にどうやって入れ
ていくかというのが大事です。例えば、運動会
で避難所の表示シートを使うとか、ふだんの取
り組みの中でどう入れていくかです。日本語教室
という取り組みと災害が起きたらどうなるかと
いうのをうまく入れ込んでいくのが大事です。

(質問者3) せっかくこういうマニュアルを
作ったものですから、先ほど出前講座というお
話があったと思うのですが、ボランティアの日
本語教室にこれを持って出前講座に行きまし
た。30分でも1時間でも、その教室で勉強
している外国の人に、地震とはこういうもの
で、こういうふう準備しておけば怖くないよ
という話をするのです。外国のかたは不安だ
と思っ
ている人は非常に多いのです。不安を安心に変

えるために、少しでも先に情報を知っていれば
いいかなと思って、出前でやり始めていますが、
まだあまり長続きしていません。ほかにもそ
うような活動をしているかたがいらっしゃ
ったら、ぜひあとで聞かせていただきたいと思
います。

(質問者4) 私は名古屋市港区に住んでおり
ます鳥山です。あいち防災カレッジを卒業した
者です。これを受けたのは、私は町内で自主防
災会の担当だったからです。

いいお話がたくさん出ているようですが、ま
だまだ日本人自身が地震に対しての認識が、行
政をはじめとして薄いと思います。特に田村
さんをお願いしたいのですが、神戸で大きな災
害を受けられて、いい反省の資料がたくさんあ
ると思います。自主防災がしっかりしたところ
は火災も少なかったということもお聞きしてい
ます。ポートアイランドは、あれだけ大きな建
物が建っていても、建物が倒れなかったのはな
ぜかということもあります。だから、資料がし
っかりしているうちに、そういうものも調査を
していただいて、こういう具合に皆さんに発表
できるような仕組みを作っていただけたらどう
かと思います。

もう一つ、羽賀さんにですが、地域によっ
ていろいろな災害があると言われましたね。私
は非常に反省をさせられています。私の住んで
いるところは液状化もあります。今でこそりっ
ぱな町並みができておりますが、伊勢湾台風以
前は、田んぼばかりだったのです。それ以後
は、防波堤もきちんとなったからということで、
区画整理もできて、今はもう住宅地になってい
ます。でも、防波堤はどのぐらいの震度まで耐
えられますかという質問を行政にしても、返
事は返ってきません。そうなりますと、液状化
で倒れたりした場合でも、やはり地域ごとの災
害対

策が必要なのではないかなと私は思うわけです。東海豪雨のときは東区のアゴヤドームのあるところは水があふれて被害を受けました。そういう点で、地域ごとの防災対策はどういうふうに考えておられるのかお聞きしたいと思います。

(田村) 自治体国際化協会で、横浜の多言語表示シートを全国で使えるようにということで作りました。それを総務省防災課に持っていき、全国に広められないかという話をしたのですが、「二階級特進になるので」と言われました。つまり、今は避難所の日本語の表示もないというのです。「まず日本語からですかね」と言われました。それで、これは日本語もついていますので、一緒にやったらどうですかという話をしています。

おっしゃるとおりで、日本の防災の仕組みは非常に貧困だと思います。そこをまず改善していかないといけません。外国人への対応、情報提供のことを一生懸命整えていけばいくほど、いかに日本人も含めて情報提供がお粗末なのか、いかに避難所の運営がお粗末なのかということがどんどん分かってきます。そもそもの防災なり、避難生活の水準をどうやって上げていくのかというところが、外国人に限らず、非常に問題だと感じています。

(羽賀) 今、非常に大事なお話をしてくださったのですが、日本は災害大国で、これをどうやって防災大国にするかです。実は皆さんがぶうぶうと文句を言われることは大事なのです。ニュースを見ると、「日本人は整然と並んで」とか、耐えている姿ばかりを賞賛するのですが、私は耐えないで苦痛を率直に言ったほうが良いと思います。今まで日本人はずっと耐えていたから、避難所にクオリティーという概念は全く

出なかったのです。そろそろそれを逆に前向きに考えることで、いろいろなことが生まれていく、それが防災につながっていくような気がします。

先ほど地域特性というものが出ているのですが、それはまさにその地域の人たちがいざというときにどうするかということで、もう一度防災を通して新しい地域づくりにもなると思います。ですから、その視点で皆さんがお話をされることは大事ですし、それを楽しいイベントとくっつけてすることが大事だと思います。

(質問者4) 私の地区も避難所が小学校とか中学校ですが、全部2階なのです。弱者なんかかわいそうなものです。そのような状況ですので、もっとやかましく言わないといけないかなということで、反省させられました。ありがとうございました。

(佐藤) 名古屋市ですね。地震が起きたときにその地域はどのような状況でどのような被害が起きるかということ、地図をメッシュ状にして、ここは液状化するとか、ここは崖が崩れてくるといったものを出しました。各家庭にあるはずなのですが、見ている人が少なかったりするので、行政側が出す情報も私たちはもっと注意して見なくてはいけないし、またどういう情報が欲しいかということも行政側にも要求していかなくてはいけないかもしれませんね。

(質問者5) 名古屋大学の寺澤と申します。日系人、主にペルー人の滞在長期化に伴う求める情報の質と量の変化について研究をしています。情報弱者であることが、即災害弱者になるというのがテーマになっています。今日のお話は本当に自分の仮説の裏づけにもなる大変得がたいお話だったと思います。

田村さんと羽賀さんにお伺いしたいのですが、今、本当に多言語のサービスはそれぞれ自治体で充実を図ろうとかなり努力されていますし、横浜市などが充実しているのもよく存じています。それをひな形としてインターネットからダウンロードしてプリントアウトして、実際に使っている自治体も多いと聞いています。今後ますます日本が、多文化化、多言語化していく段階で、どこまで多言語にしていくのかという問題があります。例えば4か国語のところがあり、6か国語、7か国語のところがあり、9か国語というところも出てきています。ただ、それをし始めると、今度はやっていない言語をやらなければいけなくなってしまいます。たとえばそれがアゼルバイジャンであろうが、グルジアであろうが、トルクメニスタンであろうが、それぞれの国の人の言葉を尊重するのであれば、さらに多言語化していかなければいけなくなります。

それと反対の動きとして、ブラジル人が非常に多くなっている自治体にとっては、ブラジル人とペルー人、ボリビア人がひとからげになってしまって、ポルトガル語とスペイン語と明らかに言語は違うのですが、似ているからといって全部ポルトガル語になってしまいます。それは浜松市さんでもご苦労があると思います。今後、多言語化はどこまでやっていくべきだとお考えでしょうか。

(田村) 先ほど紹介した自治体国際化協会の表示シートなどは、とりあえず6言語で作成し、そして地域の実情に合わせてあとでカスタマイズしていくことを前提に作っています。今の横浜市のものでそのままダウンロードしかできないのですが、今回、横浜市にお願いをして作ってもらっているものは6言語から組み合わせを自分で選んで4言語か5言語で表示できるように

なっています。それから、追加で情報を入れられるようにしています。携帯もそうですし、音もそうです。追加でそれぞれの自治体が地域特性に応じて多言語化していくという前提で、国の外郭団体ですので、最低限のものはそろえたということです。

もう一つは、神戸にも国連の防災センターがありますが、ああいうところで、日本の経験を基にこういうものを作っている、ほかでも使えないかという話をしていかないと、少数の言語のところは日本の自治体では対応できませんので、日本の蓄積をほかの地域でも使うようにしたらよいと思います。例えば今回、自治体国際化協会で作る「津波です。避難してください」はすでに6か国語で音になっているわけです。これをほかの国で使ってもよいのです。逆にほかの国にいる日本人が日本語でそれを聞けるといいかもしれないですね。今やっている多言語のものは自分たちで作っていますが、それに加えてほかのところとどう一緒につながってやっていくかということが大切です。

(質問者5) 外国語で情報を提供すると同時に、例えば15年日本に住んで日本語が分かるようなかたに対して、易しい日本語で説明する方法もあると思います。

(羽賀) 私のところはFMで継続してやっていますが、第一言語は分かりやすい日本語です。なぜかというと、日本へ来られて生活上必要ですから、これぐらいの日本語は分かったほうが良いと思ってほしいというメッセージでもあります。

先ほどの多言語の対応については、基本的には田村さんが言われたのがよいと思います。そこにカスタマイズしていく。ここで市民連携、地域だけではなく、地域の枠外でどうやって



ITを使ってネット化して弱者を救済するかです。弱者がなお弱者になるという状況を止めるには、これしかないと思います。CBOといわれる市民ベースということ、これからどういうふうを考えてNPO化していくかということも、防災大国としての一つのありようです。

私と田村さんが言ってきたのは、NHKは一体何をしているのだということです。多言語で発信する能力は幾らでもあるのです。アナウンサーは現地の人をたくさん雇っていますから、何が起きたかテロップをちょっと流すだけでいいわけです。これは日本という国家の品格が問われていると思います。

(質問者6) 伍と申します。中国から来た名古屋大学の留学生で、災害を研究しています。今日のシンポジウムを聞いて、大変心温かく感じました。こんなに一生懸命に外国人への情報提供を考えている人たちがいるので、外国の人は心強くと感じています。しかし、一つの問題点に気づいています。例えば、田中先生は名古屋大学では防災関係のワークショップをしている

とおっしゃったのですが、私のように、災害を研究して災害に興味を持っている留学生でも、これは初耳なのです。だから、外国人への情報提供も必要ですが、どういうふう外国人のところに届けるかがもっと大事ではないかなと思います。

もう一つ、羽賀さんと田村さんにお聞きしたいのですが、災害時のボランティアの全国ネットワークはお二人の個人的なつながりでできているのですか、それとも、行政などの関係で正式に、あるいはボランティア団体の間にできているのですか。

(佐藤) 田中さんからいきますか。留学生だけど知らなかったそうですが。

(田中) 情報の伝え方ですね。自分で全部の学部の掲示板に張るわけにもいかないし、難しいところ。いかにしてよく伝わるようにするかというのは、防災だけではなく、すべての情報について言えることですが、学部ごとに協力をしてくれる人を探して、よいネットワークを作っていくことがいちばんだと思います。私た

ちが情報を出すときに、掲示物やメールに添付して各学部の担当者に送ったりするのですが、よいネットワークを作っていないと、それがうまく学生まで伝わらないと思います。よいご意見をありがとうございます。

(田村) 私が長岡におじゃましたのはあくまで個人的なことです。市役所に電話をしたら、どうせ来るのだったら指示を出せる人が来てくださいということで、田村が行けということになりました。そのあとはオフィシャルにというか、長岡市役所で対応していただきました。

私は自治体国際化協会に1年いて、ネットワークづくりまでやりたかったのですが、結局できなかったのです。それぞれの自治体で相互連携あるいは協定をして、それぞれの市町村レベルでの連携の積み重ねが結果として全国的なネットワークになるのが本来の姿だというのが結論です。総務省や消防庁が全国でやりなさいと言ってネットワークを作っても、多分機能しないだろうと思います。

例えば愛知県が愛知県内の市町村全部にやりなさいと言っても、別に県から言われたからやろうとは思わないという市長さんもたくさんいると思います。ちゃんと機能するネットワークは、ボトムアップというか、それぞれの自治体どうし、あるいは国際交流協会や大学などと相互に連携をし、それが広がって全県的なネットワークになるというほうが多分うまくいくでしょう。

最後に一つだけ申し上げますと、日本の役所は道具を作るのが好きです。翻訳して終わりというものがたくさんあります。使っていません。翻訳は楽です。やったらやったように見えます。でも使わないと意味がないですね。これからは全国に埋もれているそういう道具を引っ張り出して、年に2回ぐらい訓練をして、カスタマイ

ズやメンテナンスをしていくという、本当に意味のある道具の使い方をする必要があります。今は、おっしゃるとおり、いろいろなワークショップや翻訳されたものはたくさんありますが、ちゃんと使える人があまりいない、横につながっていないというのが現状だと思います。

(佐藤) ありがとうございます。羽賀さん、いかがでしょうか。

(羽賀) 組織はプライベートなものかということですが、実はプライベートではなくて、国際交流基金、国際協力機構(JICA)、国際協力銀行(JBIC)、自治体国際化協会の4つがお金を出してくれて、全国で初めて3回連続で、これからの内なる国際化の問題をやったのです。伍さんが言われたことは、大きな日本の課題だと思っています。

1990年代、日本は姉妹都市構想ということで、いろいろなところに国際交流協会ができたのですが、ほとんど受信でした。受信力を持ったところが何か国際化した、サロンの要素が非常に強かったのです。この多文化共生というテーマは、むしろ違うものをどういうふうを超えて理解してもらえるかという発信をしていくという、非常に責任の重いシステムです。それが今、日本がまさにすべきことであって、皆さんの考えておられる防災というのは、各地域であっても、それが共有される場に出ていってコンセプト化され、そしてもう一度自分のところに戻すという作業が全国ネット化されるべきです。

(質問者7) 名古屋大学の学部4年の園山と申します。私はラジオに興味があります。特にローカルのFMやコミュニティFMで情報を伝えることに興味があります。神戸や新潟の震災の



ときに、これがどのような役割を果たしたのか知りたいと思います。外国人のかたの反応は実際にどうだったのか。また、神戸の場合は多言語FMが元から運営されているということですが、新潟は元は日本語だと思います。それをどういうふうにして外国人のかたに聞いてもらうように引き付けたのかをお聞きしたいと思います。

(田村) 音を電波に乗せる意味というのは二つあって、一つは外国人に情報を届けるということと、もう一つは日本人にこういう言語を必要としている人がいるのだということを示すということです。

外国人にとっても二つの意味があります。一つは情報を得るということですが、もう一つは安心を得るということです。安心を得るということにも二つありまして、一つは、例えば音楽や漫才などを流してもらうと気持ちが落ち着いたというかたが、神戸のときも多かったです。もう一つの安心は、公共のものである電波で、自分たちの言語が扱われているという安心感です。先ほどから羽賀さんが何度もおっしゃって

いる、自分たちは見捨てられていないのだという安心感です。

情報提供の面ではちょっと辛口の評価です。長岡でもアンケートを取ると、NHKのテレビの放映を見ていたという結果が出ています。ふだんラジオを聞かないからです。ふだんから多言語でやっていれば、災害時もラジオのスイッチを入れたと思います。今後はふだんから多言語の情報がラジオから流れていて、ふだんから聞いているという環境があれば、外国人にとってもFMあるいはコミュニティFMが重要なツールになると思います。

(羽賀) 長岡の場合はFMを出力を上げて飛ばしたのですが、旧市内にも届かなかったのです。やはり山間地には無理です。それから、FMは特殊なラジオが要るわけですが、それを持っていないから聞けません。

実は、ブラジルのかたたちが長岡の旧市内に多かったので、領事が来られたときに、ラジオに出て話してもらったのです。それまではパニック状態だったかたが、それで落ち着きました。母語で感情を込めて、「あなたたちの後ろ

に私がいます」と言ってもらっただけで、静まるのです。ラジオのすごさは、感情や思いを言葉にして伝えられることです。これはメールにはない力です。そういう意味では可能性は大きいと思います。ただ、これをどういうふう to 日常化していくかという課題があると思います。

AM ラジオが地上デジタルになったときには膨大な情報を流せるので、まさにNHK がやってくれればと思っています。

(田村) NHK は今、総務省の特殊法人になっていまして、7か月ほど前にヒアリングに行ったときは相手にしてくれなかったのが、2か月前に行ったら、部長さんまで出てきて、これは公共放送の役割ですからぜひやりますとおっしゃっていました。最近、変わってきて、突破口が開けそうです。

(佐藤) では、田村さんのプレッシャーが効いたということですね。

(田村) 道具は国際化協会で作ったので、多言語の文字情報はあります。あとは、渋谷のNHKからのトップダウンではだめで、各県と地域の放送局で、例えば、名古屋放送局と愛知県の国際交流協会が災害時にこのテロップを流すという協定さえ結べば、技術的には可能です。地上波デジタルになっているので。

(佐藤) NHKには国際放送があるわけですね。

(田村) 総合テレビでいいのです。それは地域でやってもらえればいい話なのです。もうそこまで技術は進んでいるので、やるだけです。

(羽賀) 実験は終わっているそうです。いつで

も使えるのです。上がいいと言わないだけだそうです。

(佐藤) 国際感覚がない人が上層部にいるということでしょうか。

(質問者8) 知多郡東浦町から来ました磯村美智子と申します。地元で防災のボランティアの会をしております。東浦町は4万8000人ぐらい小さな町で、その一画に790人近くのブラジルのかたが県営住宅に固まって住んでいます。

今日の題は「災害弱者をどう救うか ～外国人への情報提供を考える～」ですね。私は外国人が本当に災害弱者かと実は疑問に思っています。私たちはブラジルの方の家庭訪問から始めました。言葉で困っていることがあるのではないかと思ったからです。私自身はポルトガル語は全くできないのですが、ブラジルの方の個人のおうちに行って、片言の日本語で始めたのです。ブラジルの方が最初に言ったのは、「これは役場からの手紙だけど、何が書いてあるのか」と言うのです。日本語を読めないはずなのに、なぜ役場からの手紙だと分かるのかと聞いたら、電話番号が役場のものと言うのです。

また、保健センターの予防接種がありまして、日本人が85%ぐらいの接種率だったのですが、ブラジルのかたは35%ぐらいでした。その理由がやはり通知が届かない、何の予防接種か分からないということです。

そこで、いろいろなところからポルトガル語の資料を集めて、また、日本人でブラジルに赴任していたことがあるかたを連れてきて、翻訳してもらって、保健センターから発信してもらいました。結果は日本人と同じぐらいに接種率が上がりました。

その後、日本語教室が必要だということで日本語教室を始めました。それは今はちょっとで

きなくなりましたが、ブラジル人のかたたちが自発的に自分たちの情報誌が欲しいということで、ボランティアグループの情報誌を作る予定です。それは全戸配布になる新聞で、そこに私の防災のコラムを時々載せてくれるのです。いざとなったら、防災の情報も発信できる、全戸配布ということが強みです。総合防災訓練も賛同してくれて、ボランティアに参加してくれています。

今、そのボランティアの支援本部を作っているのですが、その中にもブラジルの人に入ってもらって、災害が起きたらブラジルの人が直接ポルトガル語でやり取りできるようにしたいというのが私の目的です。日本人はポルトガル語で言われても分かりませんが、スタッフにブラジル人のコーディネーターを作れば、もっと効率よくできます。学校の先生だった人やブラジルの軍隊で働いていた人もいて、的確に動けるのです。消防士だった人もいます。

そういうことを考えると、ブラジルの人が災害弱者だというのは、かってにそう思っているだけで、それは言葉の壁だけです。言葉の壁をうまく取り払えば、私たちと全く対等に動けるはずなので、私としては災害弱者ととらえることはおかしいのではないかと考えているのですが、羽賀先生はどうでしょうか。

(羽賀) それは非常に特殊な地域特性だと思います。私のところは全然横につながっていません。ですから、ブラジル人というくくりはできないのです。横に顔がつながっていれば、そうやって皆さんが一つにできるのですが、うちはしょっちゅういろいろなことを仕掛けてグループ化しようとするのですが、全くつながらないのです。住んでいるエリアが違うというだけで、そうはならないのです。事が起きたときに、もうギブアップして、崩れかけたアパートで、も

ういいやと言っていた人もいたのです。まさに弱者ですね。それを口コミで私たちは拾っていったのです。孤立している人が多い地域とある程度まとまっている地域では違います。

(質問者8) ブラジルの人がすべてまとまっているという意味ではないのです。最近、情報誌のおかげで、情報がすべての人に入るようになっただけで、グループとしては、例えば同じ宗教のグループや同じ親族のグループなどです。ブラジル人だけで一緒になるという意識は全く向こうの人たちはないのです。ただ、今の状況ではそういうことが少しずつ可能になってきたのです。だから、私としてはもう弱者というとらえかたをしないで、対等に動けるような形を作っていきたいと思っています。

(羽賀) なるほどね。私のところはまだそこまではないですね。派遣会社に首を絞められていて、何かあれば派遣会社が、私たちが首を出しただけですばとやります。これは弱者以外の何でもありません。ですから、労働基準監督署まで我々がついていって、いろいろな問題解決をしています。一人の人格を持った人間としての扱いは、まだまだ地域で受けていないのです。それは企業という問題が一つあるのです。

ですから、いろいろな企業の中で、その人たちがなかなかほかの人たちとかかわりません。日曜日に我々がイベントをしても、日曜日の夜中も仕事をしているという問題もあります。それから、学校です。義務教育ではないのですね。行きたい人は行っていいということで、実は就学率が半分に満たないのです。その子たちの問題をどうするか。大人が自分たちのことでお手上げになってしまっていると、我々がその子たちに手を差し伸べてやらないといけません。



(質問者8) 就学率が半分に満たないというのは、小学校でということですか。

(羽賀) そうです。ドロップアウトしてしまうのです。それで、ポルトガル語も分からない、日本語も分からない。そして、若くして妊娠してしまうのです。

(質問者8) 子どもたちの就学率が上がらないというのは中学になるとかなりあるのですが、小学校は何とか行っていると思うのですが。ただ、私は日本語教室を6年ほどやったのですが、いちばんの基本は母語をきちんと学ぶことで、次に日本語だと思えます。そうでないと国に帰っても大人として働けなくなってしまいます。

(佐藤) 現場でのいろいろな悩みや問題があるようですが、それはまた後ほどにさせていただきます。最後ですが、このシンポジウムの開催に尽力をしてくださいました、災害対策室の鈴木先生からのご質問を受けたいと思います。

(鈴木) 今日はお話を伺って大変感動しています。災害対策室も学内で情報が伝わっていないことが分かりました。それと、災害対策室としては、学外とどういうつながりをするべきかということ、この3年間くらい試行錯誤してきました。最も大事なものは人とのつながりということで、協働という言葉です。

例えば、マスコミの人たちと過去5年間、毎月同じメンバーで勉強会をしています。テレビに出てくる、いつもニュースを読む人たちが日ごろ防災の話聞くのです。マスコミの人の中にもとても熱い人がいます。神戸のときには悪いことをしたという反省に立って、災害のときにどうしなければいけないかと一生懸命考えている人たちを交えた取り組みをしています。名古屋で災害があったときは、マスコミの動きは他地域とは違うのではないかと期待しています。

今日、非常に共感を持ったのは、「災害弱者をどう救うか」の答えは何なのかと考えて聞いていたときに、ツールではないというのが最初に出てきて、マニュアルではないというものが出てきて、結局、心とか何かその辺のことなので

すね。お二人の講演者が同じくおっしゃったのは、日ごろの壁を低くすることでした。それから、災害のその場になってしまったら、見捨てられていないよというメッセージを伝えるということでした。留学生センターの田中先生がいつも留学生たちの名簿をかばんに入れているのは素晴らしいことだと思います。それで安心感が全然違う。そういうことを大事にして、それをコンセプトとして発信しなさいとおっしゃいました。どうもその辺に答えがあるのかなと思います。とても難しいので、ぜひ羽賀先生と田村先生にはアドバイザーについていただきたいと思うぐらいです。人を生かして自分も生きるということもおっしゃいましたが、そのあたりのことについて、このあと懇親会にもご参加いただいて、もっとお教えいただきたいと思っています。

(佐藤) 講演も含めて4時間近く話をしてきましたが、あっという間のような気がしませんか。非常に意味のある話がたくさん出たと思います。

ジャーナリズム災害ということを経験された方がおっしゃったのですが、ジャーナリストの人たちもここにいらっやると思います。阪神・淡路大震災のときにもたくさん私たちは報道を見たわけです。高速道路の途中で車が引っかかっていたり、たくさん大きな火事があって、その下に人がいるのだということを映像で見ました。それは被災者以外の視聴者、全くその場にはいない人たちに向けての報道だったわけです。それは視聴率というものも大きな要因になったのではないかと思います。本当に情報を求めて

いる被災者の人たちにどういう情報をどのような手段で伝えていくかということ、これからぜひその教訓を踏まえて考えていただくとよいと思います。

また、阪神・淡路大震災のときにボランティアの活躍が大変話題になりました。ボランティア元年ともいわれました。今日、質問して下さったかたの中には、ボランティアで日本語を教えていたり、地域の人たちのために動いているかたたちがたくさんいらっやっやって、ボランティア精神にあふれる人たちが地域で活躍してくださっているのだと思いました。そういったかたたちがこの場で顔を見合って話し合いができたということは、非常に意味があるのではないかと思います。

また、留学生のかたも来ていただきました。日本語が分かる外国の人たちがその情報をコミュニティに持ち帰ることが大事だという話もあったのですが、名古屋大学の留学生は1200人もいるわけですし、ある程度日本語も分かるわけですから、そういった人たちが情報を伝える側にもなって活躍してくれるとよいと思います。

今日は有機的な人のつながりがたくさんできたと思います。羽賀さんと田村さんにはどうもアドバイザーになっていただけそうです。名古屋で何かあったら羽賀さんや田村さんが駆けつけられるのではないのでしょうか。私たちはすぐお二人の顔を思い浮かべますので、よろしくお願いいたします。

それでは皆さん、長い時間、ありがとうございました。

(資料)

(財)横浜市国際交流協会による 「災害時に役立つ外国語の表示シート集」について

本シンポジウムの基調講演やパネルディスカッションでは、(財)横浜市国際交流協会による「災害時に役立つ外国語の表示シート集」に関する内容が多数とりあげられました。シンポジウムの時間の中では、時間の制限もあってこの表示シート集について十分な解説や内容の紹介をすることができませんでした。ここでは、横浜市国際交流協会のホームページの内容に従って、「災害時に役立つ外国語の表示シート集」を紹介します。

財団法人横浜市国際交流協会

<http://www.yoke.or.jp/index.html>

災害時に役立つ 外国語の表示シート集 (横浜版)

http://www.yoke.or.jp/saigai_sheets/index.html

1. 概要

大地震など、大きな災害が発生した時には、地域の外国人も日本人と一緒に避難場所で暮らすことになります。避難場所では被災者への様々な情報が提供されますが、これまでは掲示された案内や情報がすべて日本語の場合が多く、外国人たちは何がどうなっているのかわからず、普段以上に不安が大きくなり、そのことが原因で避難所の運営に混乱をきたした場合があります。

(財)横浜市国際交流協会では、外国人被災者のそうした不安を少しでも解消し、できるだけスムーズに大切な情報が伝わるにはどうしたらよいかの検討を進めました。そしてその結果をもとに、災害時に避難場所が必要になる情報文を事前に翻訳し、外国語で掲示してもらうためのシートを2001年3月に作成しました。シートの作成の際には、横浜市内の国際交流ラウンジ／コーナー等で外国人支援に関わる人々が集まって検討を進めました。また、1995年の阪神・淡路大震災後の神戸で活動したNGOからのアドバイスも考慮したものとなっています。翻訳されている言語は、英語、中国語（簡体字）、中国語（繁体字）、韓国・朝鮮語、タガログ語、ポルトガル語、スペイン語、ベトナム語、タイ語、カンボジア語の10言語となっています。

2. 表示シートの使い方

この表示シートでは、発災後、通訳や翻訳の体制が整わない間（おおよそ3週間以内）に避難場所とその周辺で掲示される言葉が用意されています。シートの主な使用者は、避難場所の運営委員会の方々が想定されており、外国人とあまり接したことがない人々でも使いやすいように工夫されています。

具体的な使用にあたっては、以下のような手順を進めることが推奨されています。

- ・日本語の文章も必要なので一緒に掲示する。

-
- ・ A 3サイズくらいの大きさに拡大コピーして使う。
 - ・ シートの下線部に、運営委員会で数字や場所の名前を入れる。
 - ・ 場所の名前は中国語と韓国・朝鮮語の場合は漢字とひらがなで、その他の言語はローマ字で書く。
 - ・ 時間の書き方は、タガログ語以外は 24 時間制で、タガログ語は 12 時間制で（午前 = am、午後 = pm）記入する。
 - ・ 不要なもの、あてはまる対応がない言語は削除して（横線で消すなど）掲示する。

資料の最後に実際の掲示例の見本を示します。

3. 用意されている表示シート

「場所の案内など」、「避難所内生活」、「配給」、「医療」、「外国語・通訳に関するもの」、「交通」、「危険等に対して注意を呼びかけるもの」、「避難所外生活」、「避難場所の外に掲示するもの」、「行政情報など」という 10 種類の分類の中に合計で 79 枚のシートが用意されています。この資料では、代表的な 11 枚のシート（※）を掲載しました。

場所の案内など

- 1 避難場所 （※）
- 2 立入禁止 （※）
- 3 許可なく入らないでください。
- 4 喫煙所。ここでは たばこが吸えます。
- 5 禁煙
- 6 ここで火を使わないでください（火気厳禁）。 （※）
- 7 地域防災拠点運営委員会
- 8 地域防災拠点運営委員会からのお知らせ
- 9 相談窓口

避難所内生活

- 10 この水は 飲むことができます。
- 11 この水は 飲むことができません。
- 12 この水道は 使うことができません。
- 13 ここで湯を沸すことができます。
- 14 ここでシャワーを浴びることができます。
- 15 風呂に入ることができます。
- 16 男
- 17 女
- 18 このトイレは 使うことができます。

- 19 このトイレは 使うことができません。 (※)
- 20 ここで洗濯ができます。
- 21 ごみ置き場
- 22 びん・缶 置き場
- 23 ペットボトル 置き場
- 24 カセットボンベは ガスを抜いて捨ててください。
- 25 消灯時刻 △時△分
- 26 携帯電話は ここでかけてください。
- 27 この電話は 使うことができます。
- 28 この電話は 使うことができません。
- 29 国際電話を かけることができます。
- 30 国際電話を かけることができません。
- 31 ここで携帯電話の充電ができます。
- 32 ここで充電は しないでください。
- 33 短い時間をお願いします。
- 34 無料
- 35 利用時間 △時△分から△時△分まで

配給

- 36 食べるものは △時△分に配ります。 (※)
- 37 給水車は △時△分に来ます。入れ物を持ってきてください。
- 38 特別な食べ物が必要な人は 本部（運営委員会）に知らせてください。
- 39 生活用品は △時△分から配ります。

医療

- 40 高齢者・子ども・けが人が優先です。 (※)
- 41 医者がいます。
- 42 看護婦がいます。
- 43 病人・けが人がいる場合は救護の係に知らせてください。
- 44 いちばん近い病院は ○○です。
- 45 この地域の医療救護拠点は ○○中学校です。

外国語・通訳に関するもの

- 46 ☆☆語のラジオニュース△時△分 △△ MHz (FM) / △△ KHz (AM)
- 47 通訳が必要な場合は本部（運営委員会）に知らせてください。
- 48 ☆☆語を話せる人がいます。
- 49 ☆☆語の相談窓口の電話番号は △△△-△△△△です。 (※)

* 46 と 48 と 49 の☆☆には、それぞれの言語名が入っています。

交通

- 50 ○○行きのバスは △時に出ます。
- 51 ○○線は 動いていません。 (※)
- 52 ○○線 動いているところ ○○駅 — ○○駅
- 53 ○○線 動いていないところ ○○駅 — ○○駅
- 54 動いているバスの路線：△△
- 55 動いていないバスの路線：△△
- 56 ○○空港は 使えます。
- 57 ○○空港は 使えません。

危険等に対して注意を呼びかけるもの

- 58 この道は 通ることができません。
- 59 火事に注意してください。
- 60 あぶない。さわるな。
- 61 建物の中に入るな。 (※)

避難所外生活

- 62 開いているスーパー・コンビニ・店
- 63 開いている銭湯
- 64 開いている銀行・郵便局
- 65 利用できる井戸水・湧き水

避難場所の外に掲示するもの

- 66 この地域の避難場所は ○○小(中)学校です。 (※)
- 67 わからないことは、避難場所で聞いてください。

行政情報など

- 68 ○○区災害対策本部
- 69 ○○区災害対策本部からのお知らせ
- 70 次の人がどこにいるかを知っている人は 本部(運営委員会)に知らせてください。
- 71 遺体安置所 (※)
- 72 り災証明書は 災害にあったことを証明するものです。いろいろな費用の減免や給付の申請に使います。大切にしてください。
- 73 り災証明書は △月△日からもらうことができます。
- 74 問い合わせは 区役所へ

- 75 一時使用住宅の入居者を募集します。
- 76 申込書は △月△日からもらうことができます。
- 77 義援金をもらうことができます。申請受付は △月△日からです。
- 78 申請受付場所
- 79 申込締切 △月△日

4. 安否確認用カード（外国語版）

英語／中国語（簡体字・繁体字）／韓国・朝鮮語／タガログ語（フィリピン）／ポルトガル語／スペイン語／ベトナム語／タイ語／カンボジア語

本資料では英語、タガログ語、ポルトガル語の3例を掲載します。

5. 避難場所で外国人被災者に配慮すべきこと

日本語がわからない、文化や習慣が違うことなどから、外国人に対して配慮が必要なこともあります。(財)横浜市国際交流協会では次のようなことを心に留めておくことが必要であると指摘しています。

●ことば

- ・日本語がよくわからない外国人は、日本人に話しかけることが想像以上に大変なようです。日本語でいいので、こちらから声をかける気配りが大切です。
- ・日本語を話せる外国人でも、読んだり、書いたりできない人もいます。
- ・自分の国の言葉でも、読んだり書いたりできない人もいます。「掲示をしたから、それを読めば足りる」ということにはなりません。いろいろな方法で、根気よく説明することが大切です。
- ・絵で説明するのも有効な方法です。
- ・日本語ができるかどうか、どの程度できるかを把握しておく、避難場所の中での通訳を頼むときに役立ちます。
- ・情報等のアナウンスは、易しい日本語で、ゆっくり、わかりやすく。ひとつの文章は短くします。カタカナ語はかえって伝わりにくいものです。
- ・外国語版の地図を作っている区もあります。活用しましょう。

●文化や習慣の違い

- ・宗教などの理由で食べられないものがある人々もいます（例：イスラム教徒は豚肉を食べない）。配給のものであっても、無理強いは禁物です。
- ・同一家族の中でも名字が違う場合もあるので、別の家族として扱わないように気をつけてください。

●共同生活

- ・外国人であることを知られたくない人もいることを理解しましょう。ふだん通称名で暮らしている

人もいます。

- ・外国人も避難場所と一緒に生活する権利があります。お互いに協力しましょう。

見本

No.25

しょうとう じこく じ ぶん
消灯 時刻 21時 30分

英語 Lights out at 21:30

中国語 (簡体字) 息灯时间 21点 30分

中国語 (繁体字) 息燈時間 21點 30分

韓国・朝鮮語 소등 시각 21시 30분

タガログ語 (フィリピン) Patayin ang ilaw tuwing alas 9 am/pm 30.

(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

英官時に役立つ
外国語の表示シート集 (横浜版) 2001年

No.25

No.49 ポルトガル語の相談 窓口の電話番号は 671-7209です。

ポルトガル語 Telefone da seção de consulta em português é 671-7209

スペイン語の相談 窓口の電話番号は 671-7128です。

スペイン語 El teléfono de consultas en Español es 671-7128

ベトナム語の相談 窓口の電話番号は 544-8449です。 044-

ベトナム語 Số điện thoại của phòng bàn thảo tiếng Việt là: 544-8449

タイ語の相談 窓口の電話番号は _____ です。

タイ語 มีบริการให้คำปรึกษาภาษาไทย เบอร์โทรศัพท์ _____

カンボジア語の相談 窓口の電話番号は _____ です。

カンボジア語 បើអ្នកចង់ពិភាក្សាជាភាសាខ្មែរ សូមទូរស័ព្ទទៅលេខ _____

(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

英官時に役立つ
外国語の表示シート集 (横浜版) 2001年

No.49

見本

No.52 No.52

そう てつ せん うご よこ はま えき ほし かわ えき
相鉄線 動いているところ 横浜駅 - 星川駅

英語 Sotetsu line is running from Yokohama station to Hoshikawa station.

中国語 (簡体字) 相鉄線 从横浜站到星川站之间通行

中国語 (繁体字) 相鉄線 從横浜站到星川站之間通行

韓国・朝鮮語 相鉄선이 운행하는 구간 横浜역 - 星川역

タガログ語 (フィリピン) Umaandar ang linya ng Sotetsu sa Istasyon ng Yokohama hanggang Istasyon ng Hoshikawa.

(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp 災害時に役立つ
外国語の表示シート集 (横浜版) 2001年

No.64 No.64

あ ぎんこう・ゆうびんきょく
開いている 銀行・郵便局

ポルトガル語 Bancos e correios funcionando

スペイン語 Bancos y correos en servicio

ベトナム語 Ngân hàng, bưu điện đang mở cửa

タイ語 ไปรษณีย์ ธนาคารที่เปิดบริการ

カンボジア語 ធនាគារ , ប៉ុស្តិ៍ប្រើសេវាប្រើប្រាស់

↓

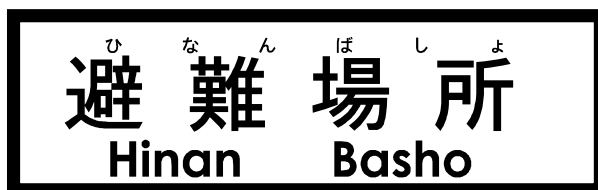
よこ はま ぎん こう かん ない し てん Yokohama Ginko
横浜銀行 関内支店 Kannai Shiten

よこ はま ちゅうおう ゆう びん きょく
横浜中央郵便局 Yokohama Chuo Yubinkyoku

(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp 災害時に役立つ
外国語の表示シート集 (横浜版) 2001年

シートの例

No.1



英語

Evacuation Shelter

中国語 (繁体字)

中国語 (简体字)

ひ な ん ば し よ
避難場所

韓国・朝鮮語

피난장소 (히난바쇼)

タガログ語
(フィリピン)

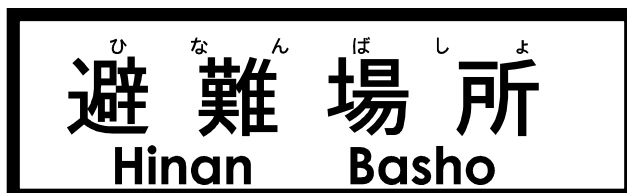
Kublihan

(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

災害時に役立つ
外国語の表示シート集 (横浜版) 2001年

No.1

No.1



ポルトガル語

Local de refúgio

スペイン語

Refugio

ベトナム語

Nơi lánh nạn

タイ語

สถานที่อพยพหนีภัย (ฮีนันบะโช)

カンボジア語

កន្លែងត្រជាក់

(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

災害時に役立つ
外国語の表示シート集 (横浜版) 2001年

No.1

シートの例

No.2

た ち い り き ん し
立 入 禁 止

英語

No Entry

中国語 (簡体字)

禁止入内

中国語 (繁体字)

韓国・朝鮮語

출입금지



タガログ語
(フィリピン)

Bawal pumasok dito.

(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

災害時に役立つ
外国語の表示シート集 (横浜版) 2001年

No.2

No.2

た ち い り き ん し
立 入 禁 止

ポルトガル語

Proibido entrar

スペイン語

Prohibido entrar

ベトナム語

Cấm vào!

タイ語

บุคคลภายนอกห้ามเข้า

カンボジア語

ហាមចូល ។



(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

災害時に役立つ
外国語の表示シート集 (横浜版) 2001年

No.2

シートの例

No.6 **ここで火を使わないでください。**

英語 **Do not make fires here.**

中国語（簡体字） **严禁烟火**

中国語（繁体字） **嚴禁煙火**

韓国・朝鮮語 **여기서 화기를 사용하지 마십시오.**

タガログ語（フィリピン） **Bawal gumamit ng apoy dilo**



(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

災害時に役立つ
外国語の表示シート集（横浜版）2001年

No.6

No.6 **ここで火を使わないでください。**

ポルトガル語 **Proibido usar fogo aqui**

スペイン語 **Prohibido usar fuego**

ベトナム語 **Cấm dùng lửa**

タイ語 **บริเวณนี้ห้ามใช้ไฟโดยเด็ดขาด**

カンボジア語 **ហាមមិនឱ្យបង្ហាត់ភ្លើងនៅទីនេះ ។**



(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

災害時に役立つ
外国語の表示シート集（横浜版）2001年

No.6

シートの例

No.19

このトイレは ^{つか} 使うことができません。

英語

Do not use this toilet.

中国語 (簡体字)

此厕所不可使用

中国語 (繁体字)

此厕所不可使用

韓国・朝鮮語

이 화장실은 사용할 수 없습니다.

タガログ語
(フィリピン)

Hindi maaaring gamitin ang toilet dito.

(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

災害時に役立つ
外国語の表示シート集 (横法版) 2001年

No.19

No.19

このトイレは ^{つか} 使うことができません。

ポルトガル語

Proibido usar este banheiro

スペイン語

Prohibido usar este baño

ベトナム語

Nhà vệ sinh này không được sử dụng

タイ語

ไม่สามารถใช้ห้องสุขานี้ได้

カンボジア語

ប្រាសាទៈមិនអាចប្រើបាន

(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

災害時に役立つ
外国語の表示シート集 (横法版) 2001年

No.19

シートの例

No.36 **食べるものは__時__分に配ります。**

英語 **Meals served at __:__**

中国語（簡体字）**食物在__点__分分发**

中国語（繁体字）**食物在__點__分分發**

韓国・朝鮮語 **먹을 것은__시__분에 배급합니다.**

タガログ語（フィリピン）**Ang oras ng rasyon ng pagkain alas__am/pm**

(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

災害時に役立つ
外国語の表示シート集（横法版）2001年

No.36

No.36 **食べるものは__時__分に配ります。**

ポルトガル語 **Distribuiremos alimentos __ hrs __ min**

スペイン語 **La comida se repartirá a las__:**

ベトナム語 **Thức ăn sẽ được phát vào lúc __giờ__phút**

タイ語 **เริ่มแจกอาหารตั้งแต่เวลา __ โมง __ นาที**

カンボジア語 **គ្រឿងបរិភោគចែកនៅម៉ោង __ នាទី ។**

(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

災害時に役立つ
外国語の表示シート集（横法版）2001年

No.36

シートの例

No.40 こうれいしゃ にん ゆうせん
高齡者・こども・けが人が優先です。

英語 Seniors, children and the injured have priority.

中国語 (簡体字) 老人、儿童、受伤者优先

中国語 (繁体字) 老人、兒童、受傷者優先

韓国・朝鮮語 고령자・어린이・부상자를 우선합니다.

タガログ語 (フィリピン) Matanda. Bata. Taong may sugat. May karapatang mauna.

(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

災害時に役立つ
外国語の表示シート集 (横浜版) 2001年

No.40

No.40 こうれいしゃ にん ゆうせん
高齡者・こども・けが人が優先です。

ポルトガル語 Prioridade para anciãos, crianças e feridos

スペイン語 Personas de la tersera edad, niños o heridos primero

ベトナム語 Ưu tiên cho người già, trẻ em và người bệnh tật

タイ語 ผู้สูงอายุ เด็ก และผู้ที่ได้รับบาดเจ็บจะได้รับสิทธิพิเศษก่อน

カンボジア語 មនុស្សចាស់ពេក កុមារ អ្នកប្រសព្វរាងរបួស

(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

災害時に役立つ
外国語の表示シート集 (横浜版) 2001年

No.40

シートの例

No.49

英語の相談 窓口の電話番号は _____ です。

英語 The phone number for the English information desk is _____.

中国語の相談 窓口の電話番号は _____ です。

中国語 (簡体字) 汉语咨询窗口的电话号码是 _____

中国語の相談 窓口の電話番号は _____ です。

中国語 (繁体字) 漢語諮詢窗口的電話號碼是 _____

韓国・朝鮮語の相談 窓口の電話番号は _____ です。

韓国・朝鮮語 한국어·조선어 상담창구의 전화번호는 _____ 입니다.

タガログ語の相談 窓口の電話番号は _____ です。

タガログ語 (フィリピン) Maaari kayong makipag-ugnayan sa inyong sariling wika sa telepono: Numero _____

(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

災害時に役立つ
外国語の表示シート集 (横流版) 2001年

No.49

No.49

ポルトガル語の相談 窓口の電話番号は _____ です。

ポルトガル語 Telefone da seção de consulta em português é _____

スペイン語の相談 窓口の電話番号は _____ です。

スペイン語 El teléfono de consultas en Español es _____

ベトナム語の相談 窓口の電話番号は _____ です。

ベトナム語 Số điện thoại của phòng bàn thảo tiếng Việt là: _____

タイ語の相談 窓口の電話番号は _____ です。

タイ語 มีบริการให้คำปรึกษาภาษาไทย เบอร์โทรศัพท์ _____

カンボジア語の相談 窓口の電話番号は _____ です。

カンボジア語 បើអ្នកចង់ពិភាក្សាជាការខ្មែរ សូមចុះស្នាក់នៅលេខ _____ ។

(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

災害時に役立つ
外国語の表示シート集 (横流版) 2001年

No.49

シートの例

No.51

^{せん}線は ^{うご}動いていません。

英語

_____ line is not running.

中国語 (簡体字)

_____ 线不通

中国語 (繁体字)

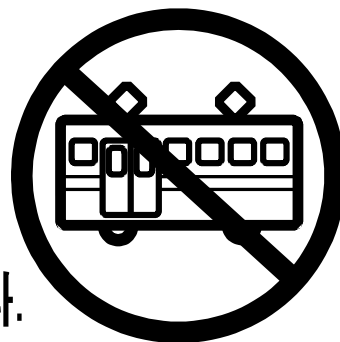
_____ 線不通

韓国・朝鮮語

_____ 선은 운행을 중단하고 있습니다.

タガログ語
(フィリピン)

Hindi umaandar ang linya ng _____.



(財) 横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

災害時に役立つ
外国語の表示シート集 (横流版) 2001年

No.51

No.51

^{せん}線は ^{うご}動いていません。

ポルトガル語

Linha _____ está parada

スペイン語

La línea de tren _____ no está en servicio

ベトナム語

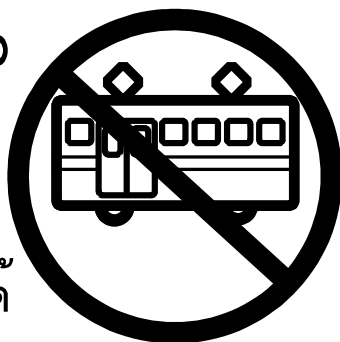
Tuyến xe điện _____ không chạy

タイ語

รถไฟสาย _____ ไม่สามารถให้บริการได้

カンボジア語

ថេភ្លើង _____ អត់ត្រូវ ។



(財) 横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

災害時に役立つ
外国語の表示シート集 (横流版) 2001年

No.51

シートの例

No.61 たてももの なか はい
建物の中に入らな。


英語 **Do not enter building.**

中国語（簡体字）**禁止进入建筑物内**

中国語（繁体字）**禁止進入建築物內**

韓国・朝鮮語 **건물 안에 들어가지 마십시오.**

タガログ語
（フィリピン）**Huwag pumasok sa loob ng gusali.**



(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

災害時に役立つ
外国語の表示シート集（横法版）2001年

No.61

No.61 たてももの なか はい
建物の中に入らな。

ポルトガル語 **Proibido entrar dentro do edifício**

スペイン語 **Prohibido entrar**

ベトナム語 **Làm ơn đừng đi vào trong toà nhà**

タイ語 **ห้ามเข้าไปในตึก อาคาร บ้านเรือนโดยเด็ดขาด**

カンボジア語 **សូមកុំចូលទៅក្នុងអាគារនេះ ។**



(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

災害時に役立つ
外国語の表示シート集（横法版）2001年

No.61

シートの例

No.66 ちいき ひなんばしょ しょう ちゅう がっこう
この地域の避難場所は ____ 小 (中) 学校です。

英語 The evacuation shelter for this area is ____ Elementary school .
 (____ shogakko) (or ____ Middle School) (____ chugakko)

中国語 (簡体字) 本地区的避難場所は ____ 小 (中) 学校

中国語 (繁体字) 本地區的避難場所は ____ 小 (中) 学校

韓国・朝鮮語 **이 지역의 피난 장소 (히난바쇼) 는
 ____ 초등 (중) 학교입니다.**

タガログ語 (フィリピン) Ang Kublihan (Hinanbasha) ng Pook na ito ay nasa Mababang
 Paaralan ng Shogakko ____ (Mataas na Paaralan ng Chugakko ____)

(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

災害時に役立つ
 外国語の表示シート集 (横浜版) 2001年

No.66

No.66 ちいき ひなんばしょ しょう ちゅう がっこう
この地域の避難場所は ____ 小 (中) 学校です。

ポルトガル語 **Qualquer local de refúgio desta região
 é ____ shoogakkoo (chuugakkoo)**

スペイン語 **Lugar de refugio es en la Primaria ____
 (SHOUGAKKOU)/Secundaria ____ (CHUGAKKOU)**

ベトナム語 **Nơi lánh nạn của khu vực này (Hinan basho)
 là trường tiểu (trung) học ____**

タイ語 **สถานที่อพยพหนีภัยบริเวณนี้อยู่ที่โรงเรียนประถมฯ ____ ไชวกัดโคว
 (โรงเรียนมัธยมฯ ____ จุกัดโคว)**

カンボジア語 **កន្លែងជម្រកនៅតំបន់នេះ គឺសាលាបឋមវិទ្យា ឬ(អនុវិទ្យាល័យ) ____ ។**

(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

災害時に役立つ
 外国語の表示シート集 (横浜版) 2001年

No.66

シートの例

No.71

中国語 (簡体字)
中国語 (繁体字)

いたい あんちじょ
遺体 安置所

英語

Morgue

韓国・朝鮮語

유해 안치소

タガログ語
(フィリピン)

Morge

(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

災害時に役立つ
外国語の表示シート集 (横流版) 2001年

No.71

No.71

いたい あんちじょ
遺体 安置所

ポルトガル語

Crematório (velório)

スペイン語

Refugio de cadaveres

ベトナム語

Nhà xác

タイ語

สถานที่เก็บศพ

カンボジア語

កន្លែងតំកល់សព ។

(財)横浜市国際交流協会 TEL 045-671-7128 FAX 045-671-7187 E-mail: intlyoke@iris.or.jp

災害時に役立つ
外国語の表示シート集 (横流版) 2001年

No.71

Safety Confirmation Form (*anpi kakuninyo card*)

One form per household

避難した日時 Date you took shelter	
避難前の住所 Your address before taking shelter	Yokohama-shi -ku

Please fill out information on every member of your family.

姓 名 Name		性別 Sex	年齢 Age	連絡先（転居先）等 Contact Information	備考欄 Notes
Last	First	男 女		<input type="checkbox"/> 1 この避難場所に避難している。 <input type="checkbox"/> 2 自宅 <input type="checkbox"/> 3 他の場所に避難 (どこですか?) <input type="checkbox"/> 4 連絡が取れていない	
		Male Female		<input type="checkbox"/> 1 Staying in this shelter <input type="checkbox"/> 2 Staying at home <input type="checkbox"/> 3 Staying in another place (where? _____) <input type="checkbox"/> 4 Has not been contacted	
		Male Female		<input type="checkbox"/> 1 Staying in this shelter <input type="checkbox"/> 2 Staying at home <input type="checkbox"/> 3 Staying in another place (where? _____) <input type="checkbox"/> 4 Has not been contacted	
		Male Female		<input type="checkbox"/> 1 Staying in this shelter <input type="checkbox"/> 2 Staying at home <input type="checkbox"/> 3 Staying in another place (where? _____) <input type="checkbox"/> 4 Has not been contacted	
		Male Female		<input type="checkbox"/> 1 Staying in this shelter <input type="checkbox"/> 2 Staying at home <input type="checkbox"/> 3 Staying in another place (where? _____) <input type="checkbox"/> 4 Has not been contacted	

* Please write your name as it is written on your passport and foreign resident registration card /alien registration certificate (*Gaikokujin toroku shomeisho*).

The “Safety Confirmation Form” (*anpi kanuninyo card*) is to be used so that your relatives, friends, acquaintances, etc. may inquire about your safety. The management refers to the “Safety Confirmation Form” of the person being inquired about and confirms the person’s safety status.

However, in order to protect privacy, release of the information on this form is limited to those who allow it. Please state your preference by circling “Yes, release this information” or “No, do not release this information.”

閲覧させてもよい Yes, release this information	閲覧させないでほしい No, do not release this information
---	---

安否確認用カード タガログ語

Kard na nagpapatunay na Ligtas (Anpi kakuninyo card)

Isang pormularyo sa bawat Pamilya

Kailan napunta sa Kublihan • Shelter	避難した日時
Tirahan bago napunta sa Kublihan • Shelter	避難前の住所 Yokohama-shi -ku

Lakdaan ang nasasaad na Impormasyon, bawa't isa sa miyembro ng Pamilya.

姓名 Pangalan		性別 Kasarian	年齢 Gulang	連絡先（転居先）等 Pagtutungan Impormasyon	備考欄 Talaan
Huling Pangalan	Unang Pangalan	男 女		<input type="checkbox"/> 1 この避難場所に避難している。 <input type="checkbox"/> 2 自宅 <input type="checkbox"/> 3 他の場所に避難 (どこですか?) <input type="checkbox"/> 4 連絡が取れていない	
		Lalaki Babae		<input type="checkbox"/> 1 Narito sa lugar ng Kublihan <input type="checkbox"/> 2 Nasa bahay <input type="checkbox"/> 3 Nasa ibang lugar ng Kublihan (Saan? _____) <input type="checkbox"/> 4 Hindi pa nakipag-alaman	
		Lalaki Babae		<input type="checkbox"/> 1 Narito sa lugar ng Kublihan <input type="checkbox"/> 2 Nasa bahay <input type="checkbox"/> 3 Nasa ibang lugar ng Kublihan (Saan? _____) <input type="checkbox"/> 4 Hindi pa nakipag-alaman	
		Lalaki Babae		<input type="checkbox"/> 1 Narito sa lugar ng Kublihan <input type="checkbox"/> 2 Nasa bahay <input type="checkbox"/> 3 Nasa ibang lugar ng Kublihan (Saan? _____) <input type="checkbox"/> 4 Hindi pa nakipag-alaman	
		Lalaki Babae		<input type="checkbox"/> 1 Narito sa lugar ng Kublihan <input type="checkbox"/> 2 Nasa bahay <input type="checkbox"/> 3 Nasa ibang lugar ng Kublihan (Saan? _____) <input type="checkbox"/> 4 Hindi pa nakipag-alaman	

Pakisulat lamang ang tunay na pangalan na nakasulat sa pasaporte at foreign resident registration card (Gaikokujin toroku shomeisho).

Ang kard na ito ay isang magiging katibayan na magpapaalam sa inyong mga kamag-anak, kaibigan, o kakilala na kayo ay nasa mabuting kalagayan. Ibig namin malaman kung nais ninyong ipaalam ang impormasyon na ito. Kung Oo, bilugan lamang ang nararapat pasiya/hatol sa ibaba ng kasulatan ito:

閲覧させてもよい Maari	閲覧させないでほしい Hindi maaari
-------------------	----------------------------

CARTÃO DE CONFIRMAÇÃO DE VIDA (anpi kakuninyo card)

Formulário para cada casa

避難した日時 Data da chegada no Refúgio	Ano	Mes	Dia	am pm	hrs	min
避難前の住所 Seu endereço antes de chegar no Refúgio	Yokohama-shi -ku					

Favor preencher o espaço de informação para todos os membros de sua família

姓 名 Nome	性別 Sexo	年齢 Idade	連絡先（転居先）等 Contato para informação	備考欄 Anotações
	男 女		<input type="checkbox"/> 1 この避難場所に避難している。 <input type="checkbox"/> 2 自宅 <input type="checkbox"/> 3 他の場所に避難 （どこですか？） <input type="checkbox"/> 4 連絡が取れていない	
	M F		<input type="checkbox"/> 1 Está neste refúgio <input type="checkbox"/> 2 Está em casa <input type="checkbox"/> 3 Está em outro lugar （onde？） <input type="checkbox"/> 4 Não há contato	
	M F		<input type="checkbox"/> 1 Está neste refúgio <input type="checkbox"/> 2 Está em casa <input type="checkbox"/> 3 Está em outro lugar （onde？） <input type="checkbox"/> 4 Não há contato	
	M F		<input type="checkbox"/> 1 Está neste refúgio <input type="checkbox"/> 2 Está em casa <input type="checkbox"/> 3 Está em outro lugar （onde？） <input type="checkbox"/> 4 Não há contato	
	M F		<input type="checkbox"/> 1 Está neste refúgio <input type="checkbox"/> 2 Está em casa <input type="checkbox"/> 3 Está em outro lugar （onde？） <input type="checkbox"/> 4 Não há contato	

- Escrever o mesmo nome que consta no passaporte ou Gaikokujin Toroku Shomeisho (Cédula de registro de estrangeiro).
- Cartão de Confirmação de Vida é para usar no pedido de informação de confirmação de sua vida, sua família, amigos e conhecidos. É o meio de confirmação da sua segurança e a Administração irá procurar o cartão solicitado no centro de informação e confirmar a sua segurança e da família. Porém, para proteger a privacidade o próprio deverá escolher se está informação pode ser público ou não ; favor marcar um

閲覧させてもよい Está informação pode ser público	閲覧させないでほしい Está informação não pode ser público
--	--

おわりに

近い将来に発生が懸念される東海地震・東南海地震等への対策が急務となった平成13年度以降、名古屋大学は東海地方の地域防災力を目指した地方行政・市民・関連企業・マスコミ等との協働を推進してきました。平成14～16年度には、文部科学省の地域貢献特別支援事業の一環として、環境学研究科を中心に「中京圏における地震防災ホームドクター計画」を実施し、さらに平成17年度以降は総長裁量経費の地域貢献枠（代表：福和伸夫教授）や災害対策室の定常経費といった名古屋大学独自の予算により本事業を継続しています。

「外国人等の災害時情報弱者を如何に守るか」は、容易に解決することが難しい深刻な問題であり、まさに地域の様々な人々の連携によらなければ解決できません。本シンポジウムにおいても、「単に情報伝達ツールを作れば解決するものではなく、『あなたのことを見捨てていない』というメッセージを送ることこそ一番大事」といった本質的な指摘が行われました。こうした成果を「地域貢献事業」の一環として取りまとめることができたことについて、シンポジウムにご協力頂いた関係各位に謝意を表します。

本報告書の作成には、JST 社会技術研究開発センター平成17年度公募型研究開発助成金（研究課題「バリアフリーのための応答・支援スポットの構築」研究代表：宮尾克名古屋大学教授）の補助を受けました。

名古屋大学災害対策室長
鈴木 康弘

「災害弱者をどう救うか～外国人への情報提供を考える～」

発行日 2006年6月30日

編集 名古屋大学災害対策室
<http://anshin.seis.nagoya-u.ac.jp/taisaku/>

発行 名古屋大学
〒464-8601 名古屋市千種区不老町

表紙 稲吉直子

印刷 株式会社クイックス
〒456-0004 名古屋市熱田区桜田町19-20